



安齋筆記

一

伊勢負丈先生雜記
一部全十四卷
一名安齋隨筆
正名安齋

1冊
494
1



立ス又及ハ本阿弥ガ目利極札ナドヲ頼ニスル事
勿レ切レヌ物同々アリタメシ物ヲシテ能骨ノ切ル
ヲ用ベシ今世ノ武士ハ人ガラ賤シクナリテ心ハナ
ニクウカノ如ク衣服ナドヲ花麗ニ飾テ人ニ誇ル其
風俗ニ應ジテ刀モ及ハ鈍キカニテ外ノ飾ハ華麗也
高金ヲ出シテ作タリト人ニ見セテ誇ラシカ為也諸
事皆如此ノ風俗ニ成リ下レリ虚ヲ専ニシテ美ハ少
シ

一 常人書朝臣 或説常人ハ源朝臣ナド、書ベカラズ
ト云ヘリ按此説ハ和歌ノ懷紙ノ書式ヲ一途ニ守テ
云テルベシ懷紙ニハ四位以上氏ノ下ニ朝臣名乗リ

書ク五位ハ氏ノ下ニ朝臣ヲ書ズシテ名乗ラ書ク六
位ハ氏モ朝臣モ書ズシテ名乗バカリ書ク也又書籍
ノ奥書ナトニ五位六位也共氏ノ下ニ朝臣ヲ書ク事
若シカラズ懷紙トハ習ルベシ朝臣ハ氏ヲ離レヌ姓
トヨハナレバ也位番ニハ一位ヨリ以下何位ニテモ氏
朝臣名如此定式ナリ

一 講頌 中院通茂卿七十賀記ニ讀師發聲講頌トアリ
講頌ト云ハ講師ノ後口ノ座ニ音曲ノ人或ハ詠吟モ
シツケタル輩各キホヒカ、リテ披講ノ歌ヲタシカ
ニ聞テ詠吟スル也是ヲ講頌ト云 石野平 ○彼講ト云
ハ和歌ニフシヲ付テウタフ事也 蔵説 初ニ讀師一通リヨ

レ共延喜式ニ錢五百疋ト記サレタレバ上古ヨリノ
數目也

一海月 俗ニ海月クラゲトシテ用之誤也本草綱目ニ
載ル趣ハタヒラギ也按ニタヒラギハ平貝ナルベシ
カヒノ二字ヲ約レバキトナルカヒノ切音キトナル
一古眼今眼 予書ヲ見ルニ古ノ眼今ノ眼ト云事ヲ謂
フ古ノ眼トハ古書ヲ常ニ多ク見馴テ古代ノ風儀ヲ
能ク見認タル眼ヲ云也今ノ眼トハ今世當時ノ風儀
ノミヲ見馴テ古代ノ風儀ヲバ曾テ見知ラヌ眼ヲ云
ナリ古ノ眼ヲ以テ今世ヲ見レバ今ノ古ニ異ナル事
明ニ見エル也今ノ眼ヲ以テ古代ノ事ヲ見レバ古代

ノ事ヲモ今ノ風儀ノ如ク見成ス故明ナラズ疑ハシ
キ事多クテ解ガタシ譬バ古書ニ金百兩トアルハ煉
金ニテ秤目百兩ノ事ナルヲ今ノ目ヲ以テ見レバ金
子ノ小判百兩ノ事ト見ユル也又古書ニ八丈縮トア
ルハ尾張ノ国ヨリ出ル物ニテ長サ八丈ノ縮ナルヲ
今ノ眼ヲ以テ見レバ八丈島ヨリ出ル縮ト見ユ又古
書ニ盈トアルハ土器也今ノ眼ニテ見レハ朱漆ノ木
盈ト見エ古書ニカトアルハ腰刀ニテ六寸ヨリ八九寸
ハナキナルヲ今ノ眼ニテ見レバ打刀ト見ユ今世ハ
カトバカリ云ツカニキツバ入タル刀也大小トテオ
ス其大ノ事ナリカカ一名ツバカタトイフナリ
凡如此ノ誤リ多クアルモノナリ

ノ俗説ヲ信セズ奴婢等ガ穢ヲ忌ニスレテ其事ヲナ
サシムルニ其造ル物快ク成就セズ必穢ノ驗アリ何
ノ理ト云事悟リ難シ必其理アルベケレ氏幽冥ノ理
ナル故悟ラレザル也理ヲ以テ強テ推スベカラス我
智ノ及ヒガタキ理アリテ然ル也是ヲ以テ諸事ヲ推
スニ穢ヲバ必ズ忌ムベキ事也神事ニ穢ヲ忌ム事也
ナリ

一兼宣旨 大臣ニ任ズベキ人ニ兼日ニ何ノ日大臣
ニ任ジタマフベキ由ノ宣旨ヲ賜ルヲ云也平家物語
卷一おろしうさし月九日の日兼宣旨ヲくさすせのひて
同日大政大臣よわがらせのひに云はるるに云はるるを
ナリ

テ任大臣ノ節會ヤ行ヒ宣命ヲヨミテ大臣ニ任セ
ラルナリ。或説ニ兼官ノ宣旨也ト云ハ推量ノ妄説
ナリ

一倭大訓 倭大ヲ此方ノ俗ニ云ント云ハキヒサイ
ヌト云フヲ畧シテ。キヌト云ヒ。キヌト云ヒ。キヌト云
ナルベシ。ヌトムト横ノ音相通ナリ

一兮字 字彙ニ弦雞ノ切歌辭ト注セリ兮字ハ歌ノ
助語也漢父辭ノ歌ニ滄浪之水清兮可以濯吾纓滄浪
之水濁兮可濯吾足類也詩ニモ兮字ヲ用ル事アリ又
賦ニモ辭ニモ兮字ヲ用タルアリ賦モ辭モウタフ物
ニハ非レ凡歌ニ准シテナリナベウレヨリ又章ヲ作り

續編才モシロク作りテ歌ニ類スル者也此方ノ記録
ノ類東鑑其外ノ俗書歌ニモアウカニニウノ字リ助
詔ニ用テ書タルアリ誤也

一 大行天皇 春漢浪詔曰大行天皇万葉集ニ大行天
皇トアルハ持統天皇ノ御弟ヲ称セシ也天子崩御ノ
後謚号ヲ奉ラガルウチノ称也天安二年八月甲子夜
葬大行皇帝於田邑山陵ト文徳實録ニ見タル則是也
此大行ノ字ハ漢書ノ文字ニテ天子崩未嘗謚号故稱
大行音義ニ見エタリ

一 禪師の親王 伊勢物語又山科の禪師のみこと
ト云々ト云レハ此の御弟ト云レハ仁明天皇の皇子人麿親王

の心事と信をりニ奉ルハ之は亦ハ信ノ事ナリヤヤ
向ノ事ナリト云レハ天安二年ナリト云レハ所多賀
子ノ事ナリト云レハ此代宣稱スルニ其七ノ事ナリト云レハ
寺ノ事ナリト云レハ此代宣稱スルニ其七ノ事ナリト云レハ
えつハ此岳親王の事ナリト云レハ此親王の事ナリト云レハ
親王ト云レハ七ノ事ナリト云レハ禪師親王ト云レハ
何ニ代宣稱スルニ其七ノ事ナリト云レハ此親王の事ナリト云レハ
ハ所保親王の兄の親王ト云レハ業平の叔父ナリト云レハ
事ナリト云レハ此親王ト云レハ大同ノ事ナリト云レハ
主坊ナリト云レハ弘仁ノ事ナリト云レハ兼和ニ子孫飾貞觀
三年入唐云々唐ノ事ナリト云レハ延化ト云レハ真如親王

とと躰居太子ともヤチ又小栗栖よ行かふる何
よりして事一り保え物預よんえそ山科の隣村われ
そ山科のみことヤチも使わが如く又人康就王
と源作親王ともヤチも国史よいつたえんはし
貞観元年五月昔出家しゆあつたやハヤアツ
多賀藏子の七と日の西宮の町も出家いぢるれを
源作と名ヤチ人康と名祝はよりとるや
とくえぬるさか加く右春漢浪語よんく

一古今集歌層

春漢浪語云古今集よ貫之いとよ

物なうらうらわれ法のんやとくもわやわうら
もと古今の分なとよるつまきあまえんく余の

文もえんえんはとくは法のほやこれいとあうら
と物とわのわやうらとくも後世よ好まうらと
のめも兼好法師の時代よこの説ありふり古今集の
後り拾遺集も再いこの歌と撰い入るこれと山
法皇ともうらうらとくも物な
うらもとくもわとあつたこの世うらぬ別とくも
とくもとくも川井とくもあつた人の名もわげ
てうけうらうらとくもわとくもわとくもわとくも
とくも倉院并度記とくも此章とくもわとくもわとくも
とくも平層のゆはとくもわとくも兼好の比よとくもわとくも
物なとくもわとくもわとくもわとくもわとくもわとくも

此方儒士清国ヲ称シテ中華ト云ハ誤也中華ハ自国ヲ褒美スルノ詞ニテ国号ニハ非ズ日本ノ人ハ自国ノ日本ヲ褒美シテ中華ト云ベシ何ゾ自国ヲ夷ニメ他国ヲ中華ト称スルノ義アラシヤ杉田氏ガ中華ト称セズシテ輟耕録正字通序ニ倣テ漢ト称スルハ善一猫 和名抄ニ和名称古萬トアリ古代子コト云メルヲ後代下略シテ子エト云上畧シテコトモトモ云數年ノ老猫形大ニ成リ尾二岐ニ成リテ妖怪ヲナス是ヲ猫ニタト云フハ尾ニ岐アル故ナルベシ近頃或大家ニテ猫妖ヲナス事アリ屋上ニ寐タルヲ見シニ尾根ヨリ二岐ニ成リテ有リト其家臣ノ談リキレリ

なま 稱てぬくのりあり 昔よりいふものと云へり

一ワザト ワザト、云詞俗ニハ熊ノ字ヲ用エ本ハ故ノ字也エトサラニトヨム 説文ニ使爲之也トアリ故ノ字ワザト、ヨムベシ俗用ニハ熊ニテヨシ一ムワカシ ムワカシト云詞俗ニハ六ヶ敷ト書ク本ハ煩ノ字也ワヅラハシキ也俗ニ病ノ事ヲワヅラヒト云是モ病ニテ身躰ノムワカシキナリ一終又僅ノ訓 二字共ニワヅカトヨム又ハワカトモヨム古今集ニ 春より初、言同とつけしあいて名事のそりりあはえし一見りし

一真男鹿 古事記ニアリ是ニニヲシカト訓ヲ付タ

ル本アリ誤也サリシカトヨムベシ真ノ字サ子トヨ
ム也子ヲ畧シテサリシカ也例ナキ名目ナリハ

一 甲字訓 甲カワラクハ誤ナリ書トヨミテ頭甲トカブ

身甲フ顔甲アテハ手甲ヲ足甲アテ等ノ惣名也甲曹ト

二字連レバ甲ハ身甲トコトハ事ナリ曹ハ頭甲トカブ也東

鑑ニハ此訓ヲ誤ラス源平盛衰記大平記等ニハ甲カ

ブト曹ヨロヒト誤レリ世俗此誤ニ随ヘリ委細ニ予

ガ所著ノ甲曹名考ニ記ス今茲ニ畧ス

一 墨流 水ノ上ニ硯墨ヲ点ビ浮メテユリメグラシ

テ其墨ヲ紙ニ移シテ文ヲナスヲ墨流ト云是上古ヨ

リアル事也古今集第十物名ノ部ニ すすかぎ

えけらる すすかぎ すすかぎ すすかぎ すすかぎ

雁をかしこぶる。 雁をかしこぶる。 雁をかしこぶる。

のりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝ

を墨ちらぶそののりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝ

入きくすうきくすうきくすうきくすうきくすうきくすう

水と加へていゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝ

てゝいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝ

浮ぶゝ若のえをいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝ

中へいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝ

ゆゝいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝ

形よりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝのりいゝいゝ

夫と極まらうけしるをい作うくすらとゆるうつ
のふらしほらる書とゆきしうー或い書の中へ松ヤ
としたまこのまありけし入らうしうなまあぬらどし
ねらこの物と交せしほらる書の間へ入らうしう金
泥らどい紙らるまもほらるあまをどらし
一ゆきそてあし 万葉の物まゆとまて少ありしう
と河せの川ゆとま類し日本記の物まあまらうしうとまゆき
ゆとまらうららの切ゆかきしるまこらるはらうしうまら言
ねらうらうら河智の川らうとまてはらうの文字ゆらゆら
云らう

一古史通 新井筑後守源君義カ所著ニテ我因ノ古

史、記ス所ノ事蹟ヲ論辨セル書也舊事本紀伊弉五
部書等ヲ偽書ト知ラスシテ引用タリ歎一キ華也古
史通ノ讀法ニ曰伊弉諾伊弉冊兄ト妹ニテ夫婦ト十
リタマフ是男女配匹ノ始也ト云ヒ又甚不合尊ノ御
姨ニシテシカモ継母ニテマシマセシ王依姫ヲ娶リ
テ妃トナシタマヒシト云ヒ此余伊弉諾伊弉冊ノ二
神氷蛭児ヲ生シタマヒ三歳ニナルマテ脚々、ズト
テ流シ棄ラレシト云ヒ伊弉冊ノ神火ノ神ヲ産タマ
フ時ニ神去リタマヒ伊弉諾ノ神ミヅカラ其御子ヲ
斬テ段たぐニニナシタマヒシト云ヒ素戔嗚神父ノ神ニ
逐レタマヒシヲ天照大神軍起シテ防カレシト云フ

總テ是等ノ類ヒ父子兄弟ノ間ニ於テ其倫ノ正シキ
所ノ神ノ所行ハ異國ノ聖人ノ立ル所ノ五倫ノ正道
ニ違フ聖人ノ道ハ十六代應神天皇ノ十六年百濟國
ノ儒士王仁ガ渡リ来リシ時ヨリ傳レリ其以前我國
ニ聖人ノ道ヲ知ラサル故五倫ノ道ハ曾テ知ラズ故
ニ五倫ノ道ニ合カル事多シサモアルベキ事也是ヲ
咎ムベカラズ然ルニ名教ニ於テ何ノ教トシ鑑戒ニ
於テ何ノ戒トスル所カアルベキト云テ強テ五倫ノ
道ニ合マウニ説ヲ作テ釋キナスハ還テ宜シカラズ
其一ニニサシ置テ午ヲツケガハ直ニテ善シ我國
ノ上古神代教ヲ垂レ道ヲ説キタニヒシ事日本紀古

事記古語拾遺等ニ會テ見ヘズ度會神主等ガ偽作ノ
姙姫余世紀ヲ初ノ五部書又神令其外後人ノ著述ニ
神託ト偽リ教ノ道ヲ記セル書アリ皆儒道ヲ本ニメ
作りタル者也正直ノ道ヲ神道トスルナト云テ一
ツノ道ヲ建立シタルハ中古以來ノ事ナレベシ國史
ニナキ事也我國上古道無シ共五位ヲ奪シ者一人モ
ナシ今ニ至ルニテ然リ異朝ニハ聖人ノ道有ナガラ
君ヲ執シ五位ヲ奪ヘル者多シ我國上古道ナシトテ
モ何ノ耻ル事アラシマ

一
まゝにほくと云詞 俗に云ふまゝに云ふ詞雅詞
しんせんにまゝなり 俗に云ふまゝに云ふ詞雅詞
又求

ヘカラズ俗ニハ三国ト云テ天地ノ間ニ日本唐土天竺ノ三国ヨリ外ノ国ハナキト思フユヘ唐土ニモ天竺ニモ文字アルニ獨日本ニ文字ナキヲ耻ル意ニテ此方ニモ神代ニ此国ノ文字アリシト云出セ也ト部神道圖書ニ云近衛殿ニ天種子命ノ御筆トテ竹ニ彫付タル文字アリ是神代ノ文字也ニ云按是異国上古竹簡ヲ似セテ作タル偽物ナルベシ神代ニ文字ノ事ヲバ何ト云タルヤ文字アリシナラバ和名アルベシ

一講 或問曰講字玉篇ニ古項切習也論也字彙ニ謀也寃也告也説文ニ和辭也ナド、アリ学ヲ講スル講

釋ナド、云フハ其彖叶ヘリ今世俗ニ念仏講題目講憲比須講祭礼講ナド、云事所家ニアリ此講ノ意如何答曰是ハ学ヲ講スル講釈スルノ講ヨリ轉用シタル名也学文ニハ一人ノ所有テ弟子多ク集テ其教授ヲ受ル也彼念仏講以下ノ講モ一人ノ主領有テ同志ノ者多ク集リテ其事ヲ管ム事彼学文ノ講ニ似タレハ轉用傍通シタル也

一神代事蹟 神ト云ヘバトテ別物ニ非ズ人也神代ト云ヘバトテ別世界ニ非ズ今世界也唯風俗意志等ハ後世相違アルベキ也日本紀古事記等ノ正史ニ記ス所ノ神ノ事蹟ニ奇怪理外ノ事アリ是ハ疑フ可シ

我國ハ神代ヨリシテ應神天皇代十六ノ十四年ニテハ文字各之有神代ニ我國ノ文字故ニ神ノ事蹟ヲ記シタル書籍モ各之唯古老人ハ口ツカリ語り傳へテ受継ギ云ヒ傳へタルノモ也其詔り傳へ云ヒ傳へ幾千年ノ昔詔リナレバ詔リ違モアリ聞違モアリ覺違モアリ忘レテ漏タル事モアリ事ヲ副タル事モアルベシ百年五十年前ノ事ダニモ詔リ違へ聞違へニテ相違有テ一決セサル事アリ況マ幾千年昔ノ神代ノ事ヲマサテ應神天皇十五年ニ百濟國ノ阿直岐同十六年ニ同國ノ王仁渡リ來テ始テ我國ニ文字ヲ教ヘタリ其時ノ人文字ヲ書キ書籍ヲ讀ム事ヲ始メタレドモ

自書籍ヲ著述スル事ノ成ル位ニ至テ始テ神代ノ事蹟ヲ記シタル也諸家ニテ聞傳ル所同シカラザルガ故ニ其記ス所モ同シカラザル所アリ何レヲ實トシ何レヲ虚トセン歟定メ難シサレバ舍人親王日本書紀ヲ撰述シタルニヒシ時モ其実否ヲ定ム難キニ依テ諸家ノ記録ヲ引ヒキ一書ニ曰ト奉テ其本書ノ文ヲ其ニ載セラレタリ正直ナル書法ナリ彼奇怪理外ノ事ハ取ルベカラズ捨ベカラズ疑シキヲ闕テ其餘ヲ用ベシ異國ニテモ史記ノ三皇本紀ナドハ奇怪理外ノ事ヲ記セリ和漢氏ニ大古ノ事ハ大古ノ書籍ハ毎之ニテ古人ノ談ヲ傳ヘテ後ニ記シタル者ナレバ半

實半虛也ト思フベシ後世ノ人彼奇怪理外ノ事ヲ奇
怪理外ニ非ルヤウニ説カントテ強テ牽強附會シテ
詞ヲ巧ニシテ説ヲ作り秘傳口訣トド、稱シ国史ノ
文ヲ説クニ謎ヲ譯ガ如クスルハ大ニ笑フベキ事也
又云神ノ事蹟ヲ記シタルハ日本記古事記古語拾遺
ノ三書ヨリ外ニハ毎之旧事本紀ハ偽書也又天書ア
リ秋日本紀ニ引シ天書トハ違タル偽書也右三書ノ
外ハ皆未書ニテ後人ノ作也仏法ヲ交タルモアリ陰
陽家ヲ交タルモアリ理学家ノ説ヲ交タルモアリ儒
道ヲ交タルモアリ皆造リ物也

一漢音付吳音 松下見林所著本朝学原曰漢音應神天

皇之時始矣應神天皇之聰監聖異三韓オサテヒコトヲ瀛角受化稱西
蕃イナズム底貢厥方物文献十五年秋八月丁卯百濟阿直岐アチキ來
朝十六年春二月依岐之言ナメ徵王仁時携論語千字文ナ
文ハ梁ノ周貞嗣カ次韻セシハ應神天皇ヨリ來
後ノ時代當ル也是ハ非ナルベシ仁ハ之先出自漢高帝之後曰鸞鸞之後王狗轉至百濟王
仁ハ即狗孫也應神天皇太子菟道稚郎子師之習諸典籍
莫不通達此漢音之濫觴也桓武天皇延曆十一年令諸
生習漢音十七年定讀書音韻勿用吳音初應神天皇遣
阿知使主都加使主於吳仁德天皇雄略天皇時吳國貢
獻吳音之譯於古人亦尚矣然自欽明天皇朝ハ法入後
百濟法明來于對馬島吳音謂維摩謂吳音為對馬讀者

是也彼詞如支遁支遁字道林晉終遇于内大臣鎌足由
是欲仙書之異詔也故亦讀儒書者禁吳音須漢音正始
也大内大学寮有音博士二人掌教音明經生必失就音
博士讀五經音然後講義持統天皇賜音博士天唐續守
言薩弘怡銀及水田仁明天皇能練漢音其清濁朝野
宿禰鹿取知漢音善道朝臣真真以三傳三三傳者左
梁三禮者周禮儀禮禮記為業兼能談論但舊來不學漢音不係字
之四聲至教授總用世俗駭駭之音斯人而有此不能也
為遺憾耳○貞丈曰右日本紀續日本記水鑑續日本後
託等二見エタリ我朝漢音ヲ正シク兼ケ傳ヘタル
事右ノ文ニ云ヘルカ如シ大学寮ノ博士世々其漢音

ヲ習ヒ傳ヘテ後代惺齋先生林道春等ニ及ニテニ相
兼シ來レリ漢ノ正音ハ變セズシテ我朝ニ遺リ傳ハ
レリ然ルニ近世ノ腐儒ハ右ノ漢音ヲ傳來正シキ事
ヲ知ラズ漢音ヲ賤メテ倭音ト稱シテ彼國唐虞三代
ノ時ヨリ以來ノ正音ナリト思フハ誤リ也彼國宋朝
ニ蒙古ノ人起テ宋ヲ亡シ國ヲ奪テ國号ヲ改テ元ト
曰フ此時蒙古ノ人國中ニ充滿シケレバ一タヒ蒙古
ノ音交テ舊音變シテ訛音ヲ生ス其後明朝ニ韃靼ノ
人起テ明ヲ亡シテ國ヲ奪ヒ國号ヲ改メテ清ト曰フ
此時韃靼ノ人國中ニ充滿シケレバニタヒ韃靼ノ音
交テ舊音再變シテ訛音ヲ生ス終ニ今俗ニ云フ所ノ

唐音ト云フ音ニ成テ我國ニ兼ケ傳ル所ヲ漢音トハ
遺タル音ト成レルナルベシ我國ノ音ハ漢ノ正音也
或儒士其ガ書ニ漢音ト云ハ菅家ノ音ニテ吳音ト云
ハ江家音也菅音江音ナルベシト云シハ腹ヲ捧テ笑
フベシ菅家江家ニテ字音ヲ異ニセシト云フ事我國
ノ史書ニハ曾テ見ガル事也此國ニ生レテ此國ノ故
實ヲ知ザルハ腐儒ト云ベシ

一 漢語抄 楊氏漢語抄ハ和名抄ニ引ケリ此外ニモ
漢語抄ト云書ナリ和名抄ノ序ニ適可決其疑者亦色
立成楊氏漢語抄中畧其餘ノ漢語抄不知何人撰世謂
之ヲ甲書或呼為業書○貞丈云今世ニ桑氏漢語抄ト云

書アリ信シ難シ一本ニハ桑字ヲ揚字ニ作タルモア
リ疑ハシキ者也 諸漢語抄ノ
事忠寄説也

一 祓詞水綿襪鈴 祓詞ハ延喜式ニ見ヘタリ六月晦
日十二月晦日禁中ノ大祓ノ詞アリ是ハ中臣ノ祓ノ
詞ヲ中ニ少シ詞ヲ補ヒ加ヘ又少畧セシ所モアリ祓
ハ身ニ惡事ヲナシ正シカラヌ事ニスルハ身ノ穢ナ
ル故惡事ヲ拂ヒ除キ穢ヲ清メテ神事ヲ行フ也祝部
ヲシテ祓ハスル也自身ニスル事ニ非ズ然ルニ今世
神主トドケ神前ニ向テ祓詞ヲ讀ムハ何ノ為ヲヤ神
ニ穢ハナケレバ祓ヒ奉ルニ及バザル事也是祓ノ本
意ヲ去ヘズ唯讀物ト心得モ僧ガ仏前ニテ仙經ヲ讀

ムマ子ヲスル也又扱ハ唯一遍ヨムモノ也禁中大祓
スラ一遍外ハヨク然ルニ後代ニハ千度ノ祓万度
ノ祓ナド、云フ事アリ是人仙家ノ百万遍ノ念仏千
卷陀羅尼千部万部ノ法華經ナドノ子ヲスル也木
綿襪ハ大殿祭ノ祝詞ニ皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳
仕奉流比礼懸伴緒襪懸伴緒トアリ神ノ御膳ニ仕
奉ル領巾ヲ以テ袖ヲ奉ケ御食ヲ造ル男ハ襪ヲ以テ
袖ヲ奉ル也伴緒トハ役人ノ事也水分神祭ノ祝詞ニ
弱肩ハ太多須支取掛持由麻波利仕奉幣帛ト云
云御食ノミニ限ラズ神事ニ手ヲ使フ人ハタスキカ
クルナリユエハリハ爾ノ如此手ヲツカフ人ハ襪ヲ

掛ル也サモナキニ襪ヲ頸ニ掛ルハ在礼也然ルニ今
世ノ神主木綿タスキヲ頸ニ掛ケ神前ニ向テ祓ヲヨ
ムニ手ヲ使フ事ナケレハ襪ニ及ハザル事ナルニタ
スキヲ肩ニ掛ルハ是僧ノ袈裟ヲ掛ルニ子ヲスル也
神前ニテ鈴ヲ振ル事其来由日本紀古事記古語拾遺
令延喜式等ニ見エズ但古語拾遺ニ天昭大神窟戸ニ
入りタニヒシ時天鈿女命手ニ著鐸ノ弟ヲ持テ舞タ
シイシ事見エタリ是ハ弟ノ飾ニ付タニ鐸也且又舞
ノ具ナレバ神前ニテ振ル鈴ノ古例ニハ用ヒ難シ今
祓ノ詞ヲヨミナガラ時々鈴ヲ振リテ鳴スハ僧ノ仙
經陀羅尼ナドヲヨム時金剛鈴錫杖ヲ鳴スヲ子タ

ル也神代ニ文字ナケレバ守リ札トドモナキ也日本
紀古事記古語拾遺ナドニ守リ札ノ事見エ今世神
主祈禱シテ守リ札ヲ造リ朱印ナド押シタルヲ贈ル
事モ修驗者ノ一子ヲスル也トカク仙法ニテ人ノ帰
依スルガウラヤニシキト見エタリ又後代神主ガ神
前ニテ印相ヲスル也オノコロ島ノ印ハ尋ノ印日月
星ノ印ナドアリ是又仙法ノ一子ヲスル也神代ニ諸
神印ヲ結ビタニヒレ事上古ノ書ニ見サル事ハ私説
妄作也信スルニ足ラズ加持勸讀護身ナド、云事モ
仙家ノ名目ナリ西部ノ神道ハ本地垂迹ヲ説テ神ト
仙ヲアヘニセニユレラヘタルナレバ是ハ云フニモ

夕ラズ唯一ノ神道ト称シテ仙法緊シク忌ミナガラ
仙法ノ一子ヲスル事多シ詞ニモ仙家ノ詞ヲ云フ事
アリ神主等ガ神前ニ向テ仙者ノ一子ヲシテサニク
ノタハケヲ尽スラ神慮ニハサゾヲカシクオボシメ
スラン神ナレバコソ目ニモ見エ子人ナラバユラヘ
カ子テ吹出シ神主ガ顔ハ唾キマモレニナルベシ
一 蕙茨子訓 蕙茨子ヲ糸ニテ貫キ珠數ノ如クシテ
小児ノ玩フ故俗ニススダト云フ。ズスハ珠數也古
語拾遺ニ蕙子ノ事見エタリ其書ノ撰者斎部廣成ノ
自註ニ古語以テ意曰都須ト見エタリツズト云ハ古名
也ススダト云ハ後代ノ名也ツズトスズトカナツ

カヒ同じカラズ混ズル事勿レ神代ニ珠数ト云物ナ
ケレバズス夕一ノ名ハナシツズ云シナリ紡ラハシ
ケレバ記ス之ヲ

一大臣大連

是ヲ官名ノ如ク職原抄ニ記サレタレ

共サニハアラス大政オホミツリシ司トル人ノ臣オミノカバ子ナル

ヲバ大臣トヨム也ト云ヒシ也是加茂真淵ガ説ナリ

○貞大云大ハ貴ヘル称也

一中臣

中臣ニ三ツノ品アリ一ツニハ職ノ称也神

ト君トノ中ニテ事ヲ司ル人ヲ中津臣ナカツノミト云ナカッオ

ミヲ約メテナカトミト云フツ和ヲ約ムレバト、ナ

ル也是ハスベテ神事ヲ司ル職ノ中臣也二ツニハ神

祇官ニ侍リテ禁中ノ神事ヲ司ル中臣ニハ大ノ字ヲ

副テ大中臣ト云中臣祓ノ詞ニ大中臣トアルハ是也

諸社ノ祭ヲ司トル中臣ト差別ヲナシテ貴フ称也是

亦職ノ中臣ナリ三ツニハ氏ノ中臣アリ天兒屋命ノ

裔ニテ神代ヨリ神事ヲ司リ後ニ中臣ヲ以テ氏ニシ

タルアリ其中臣氏ノ中ニ中臣ノ清麻呂称徳天皇ノ

神護慶雲三年ニ大中臣朝臣ノ姓ヲ賜リシ也是ハ中

臣ノ祓ノ詞ニ大中臣ト云フアルニ依テ賜リシト也

續日本紀ニ見エタリ是モ賀茂ノ真淵カ説也

一吾国事失古風

神代ヨリ應神天皇十四年ニテハ

上古ノ国風傳ハリテ改テリ変ズル事ナシ彼天皇十

五年百濟國阿直岐來り同十六年同國ノ王仁采り文
學始メテ行レテヨリ漸ク古風變シ始メテ外國ノ風
イツトナク入交り欽明天皇ノ御宇仏法渡リテヨリ
天竺ノ風移リ後ニ盛ニ行ハレテ漢上ノ風ト三韓ノ
風ト天竺ノ風ト入交り又文武天皇ノ御宇ニ至テ朝
廷ノ制度倭物專ニ唐ノ風ヲ用テ我々國風ヲ改メテレ
シニ依テ弥古風ハ變シタリ故ニ吾國上古ノ事ハ皆
失テ明ナラズ

一 エビスト云名目 エビス又エビス共云音相通也
エビスヲ中畧スレバエス也ストフト音相通ユヘエ
ス轉シテエブトナル蝦夷ノ島ヲエブト云フハ是也

上古ハエビスト云シ也エビスト云ハ常ニ異ナル物
ヲ指テ云名也太弼記ニ夷弓見タリ西土ノ蛭ヒコ命ミコト三
歳ニテ是夕、ガリシト云常ニ異ナルカユヘエビス
ノ神ト云傳ヘタリ食盤食物載ル盤也俗ヲ人前ニ居
ルニハ横板ニ居ルハ常也誤テ豎板ニ居ルヲエビス
膳ト云モ常ニ異ナル故也紙ノ端裁残リテヒレ出タ
ルヲエビス紙ト云モ常ニ異ナル故也夷蠻戎狄等ノ
文字エビスト訓ヲ付タルモ外國ノ人物漢ノ國ト異
ナルガ故也漢人ハ和人ヲ見テ我ト異ナルガ故ニ和
人ヲ夷ト云フ和人ハ漢人ヲ見テ我ト異ナルカ故ニ
漢人ヲエビスト云彼ト我ト相互ニ云フ詞也然ルニ

和国ニ生レタル儒者ガ和国ヲ指テ夷狄ト云フハ自
我國ヲ夷ニスル也聖人ノ道豈如此事アランマ
一 神代文字 此事既ニ上ニ論ス此條ト参考スベシ
本朝学原ヲ注釈セシ浪華抄ハ尾張任人真野時繩ガ
所述也此人偏ニ本朝神代ニ文字アリシト云説ヲ執
セリ其抄ニ云神代文字ノ事奈部ト部ノ書ニ見エテ龜
トニ始マラル本致アリ今遺字僅ニ残レリ往年久我東
愚公ノ手書ヲ相傳ス此外三百六十五字已上ノ説諸
抄ニ見エ漢字以來件ノ古字不行故ニ世人半信半疑
ス云云○貞丈云奈部ト部ノ書トモ神道ノ事取違タ
ル事アル故其書ニ神代文字ノ事アルトテモ證トス

ルニハ足ラズ又神代ニ文字ナクハ古書モアルニ
ト書ナクハ龜トノ吉凶悔吝ヲハ何ニ依テ分クン龜
トアルカウハ文字アリテ事ヲ推シテ知ルベシト云
フ説アルハ誤也神代ニ龜トハナシ龜トハ欽明天皇
十四年ニト書ヲ百濟國ニ求メ給ヒシ事日本紀ニ見
エタリ是ヨリ龜ト我朝ニアリ神代ニハ太占トテ鹿
ノ肩骨ヲ滌々迦ノ枝ニテ焼テ占テ事アリ古事記日
本記等ニ見エタリ太占ハ文字ナクテモ占テ法アリ
シナルベシ其占法ハ絶タリ又神代ノ文字久我東愚
公ノ手書アリトテモ證ニハナラズ東愚公ハ神代ノ
人ニ非ズ偽書ヲ手書セラレタル物何ゾ證トスベシ

シヤ信スルニ是ラ不古語拾遺ニ曰蓋聞上古之世未
有文字貴賤老少ニ相傳テ前言件行存而不忘云
云是神代無文字ノ明證也然ルニ後代ノ書ニ神代文
字アリシト云事ヲ記セル書多シ其説也出雲ノ大社
尾張ノ熱田ノ社ニ神代ノ文字ヲ漆書シタル竹筒ノ
數多アリト云是其巫祝好事ノ徒ガ神代文字アリシ
ト云説ヲ實ニセント欲シテ蠶ニ其竹筒ヲ偽作シテ
神庫ニ納メ置タル也神代ノ文字ノ和名ヲ何ト云々
ルヤ文字ナケレバユリ名モツタハラズ
一 吳恭伯秦徐福 日本ハ吳ノ恭伯ノ子孫也ト云
フ事秦ノ徐福尚書ヲ持テ日本ニ來ルト云フ事異國

ノ書ニ載タレ共吾朝ノ國史ニ見ガル事ナレバ信ズ
ベカラス然ルニ近世ノ儒士異國ヲ貴ブトテ中華中
土ナト、稱シ日本ヲ夷狄ト云ヒ倭俗ナト、賤シム
ル不弔ナル徒ハ彼恭伯徐福ナドカ事ヲ實ニセント
欲シテ吾朝ノ國史ヲ信セスシテ異國ノ雜書ヲ信ズ
ルハ誤レリト謂フベシ取ルニ是ラザル見識也
一 蜷川日記 一名親元日記芸云一本ニハ外題ニ
殿中日々記トアリ殿中ノ二字ハ除クベシ文明寛正
ノ間ノ日記ナリ此日記予ガ家ノ口傳ヲ聞ガル人此
日記ヲ見テハ不審ノ事多カルベシ其口傳ハ蜷川氏
ハ予ガ先祖伊勢守同官ノ被官人ニテ家僕ノ如クツ

カヘメリ伊勢守ハ代々京都將軍ノ政所職ニ補セラ
レ蜷川ハ代々政所代ニ補セラル是政所ノ事ヲ行フ
役也サレバ右ノ日記ハ蜷川新右衛門少尉官道親元ガ
伊勢守ガ家事ヲ書タル日記也公方ボゴト革モ少シハ交レ
リ上様トアルハ將軍ノ御臺所也御方オカ御所様トアル
ハ將軍ノ御嫡子也部屋住ヲ御方貴殿トアルハ伊勢
守貞宗也兵庫助殿トアルハ貞宗ノ嫡子貞陸也御私
トアルハ公方ニ對シテ伊勢守ノ事ヲ云御父御母ト
アルハ將軍家内ニテ伊勢守夫婦ノ事ヲ御父御母
ト稱セラル父母ニ准シ給フ也尊氏公ヨリ由緒アリ
テ代々如此稱シタマフ他家ニテ知ラザル事也實ノ

御父ヲハ大御所ト云實ノ御母ヲハ大方殿ト云紛レ
ザル事也備中守殿後ニ入道ニテ常喜ト云シハ是也因幡守殿駿
河守殿與一殿下總守殿肥前守殿十トアルハ皆伊
勢守同氏守也正実房定泉房トアルハ御倉法師也將
軍家ノ御倉ヲ預ル入道也此外云々尽サレズ右ノ事
共ヲ知リテ見サレバ日々記ハスメ又書ナリ
一殿中 將軍家ノ御所中ヲ殿中ト云殿ノ音スニテ
唱フベシトテ先祖貞衡ヒラ記ニ置ケリスニテ唱ルハ
京都將軍ノ時ノ名目也今ハ世人ニゴリテ唱ルナリ
一神道 日本紀用明天皇紀ニ天皇信ノ法ヲ尊神道ト
云云神道ノ二字此ニ始テ見エタリ是ハ神祇ヲ崇メ

祭ル事ヲ神道ト云ヘル也文ヲ對ニセシガ為ニ法ノ
字ニ對シテ道ト云也中古以來正直ノ二字ヲ宗旨ニ
シテ建立シタル神道ト云フ一道ト同シカラズ中古
以來ノ神道ト云ハ正直ノ二字ヲ宗旨トシテ神ノ教
ノ道也ト云ハ三社ノ託宣ト云偽作ノ文ヲ本經ニ立
タル教也毎住法師梶原景時ガ沙石集第六ノ下ニ正
直之人室ヲ得ル事ノ條ニ云聖德太子ノ御詞ニハ謀
計雖為眼前之利潤終當レ神罰正直雖非一旦依怙必
蒙日月之哀ト見エタリ此文ヲ後人少シレ稽ヘテ天照
太神ノ神託トシハ幡大菩薩春日大明神ノ神託ヲ新
ニ作り添テ三社託宣ト号ス其文甚拙シ三社託宣ノ

詞ハ者ノ口氣アリテ織ハシ西部神道ト云フ者ハ偽
作也又神令ト云書アリ是モ神ノ教ノ道也ト云テ儒
道ヲ以テ教ヲ書キ其文詞ハ祝詞ノ如キ辭ヲ用テ偽
作シタル者也信スル事ナカレ

一 一休和尚 蜷川新右衛門尉親元日々記ニ云文明
十三年辛丑十一月廿一日壬辰天晴一休和尚ハ於
城別新ニ澄ニ繫ニ○是ヲ以テ推スニ一休ノ誕生ハ應永元
年也後小松院御宇將軍安持公家督ノ年也

一 伊弉册尊 伊弉册ノ事ト訓ハ此册ノ字字
書韻書ヲ考ルニ上ニ訓ハイ弉册ニ玉篇ニ楚責切
立也簡也小神韻會ニ初莫切又所晏切俱册或作册ト

アリナミト訓バキ字注ナレナミト訓ベキ字ハ再ノ
字也玉篇ニ千代切兩也重也仍也トアリ兩ハフタツ
也重モ二ツアルハ重ナル也仍モ二ツアルハ彼ト是
ト相仍也二ツアルモノハナラフ故ニナミト訓ベキ
ノ義アリ然レバ伊特再尊ト書ベキヲ再ト冊ト字形
相似タル故誤テ冊ノ字ヲ書タル也傳寫ノ誤ヲ改メ
スシテ用來レル也

一神書八字 八百万。八雲。八尋。八十氏人ノ類ノ八ハ
數目ノ八ニ非ズイヤト云フヲ略シテヤト云ニ八字
ノ訓ヲ借りテ書タル也是加茂真淵カ説也貞丈按詞
ニ付テハ八ノ訓ヲ借り用ヒズヲ以テハ弥ノ字ヲ用

ベシイマハイヨノ也イヨクト云ハニスクト云ニ同
ジサレバ字義共ニ不詳禰シテヤト云也夫ニハノ訓ヲ借り用ル也
或説ニハハ神道ニテ貴ア數也ト云サレ共數トスル
ハ惡シ弥ノ事トスベシ一説ニ初ノ一ト終ノ十ヲ除
去レバ殘數ハツ也初モ十ヲ終モ十ヲ每窮ナル故ハ
千代八百万ナド、云也ト此説モ數ニ拘リテ宜シカ
ラズ又理説也只イヤノ略ヤト云ニ八字ヲ借ルト云
ハ善シ

一天津金木 中臣菟ノ詞ニ天津金木 本打伐末打
斷トアリ山崎垂加ノ説ニ天津金木ノ小木ノ枝ヲ
云フコナギノ轉語ニテハ助字ナルベシ貞丈云此
分ハ非歟

今モ邊土ニテハ小本ノ枝ヲ金木ト云ト也中比ヨリ
天子工奉ル御釜木ノ類ト也云云○貞丈云木ノ枝ヲ
短ク打伐タルハ薪ノ如シ御薪ト書テ之カニキトヨ
ムニカニギハ御釜木ニテ釜ノ下ニ燒ク薪ノ事也一
トト音相通ナル故カニギヲカナキ共云ナルベシ
又和名抄ニ昂ヲ阿之賀奈倍釜ヲ未路賀奈倍トアリ
然レバ薪ヲカナ木ト云ベシカナキハカナヘ木ノ略
語也是ノ義モ亦通セリカナヘノナベヲ約ムレバ音
子トナル子ナベノ切子トト音相通ニ一カ子轉ジテ
カナトナル依テカナ木ト云是義モ亦通セリカナ木ノ略
ノナベト云方易

一 片假名平假字先後

公ノ作ト云傳フ是眞字ノ偏傍冠履ヲ省略シテ其片
躰ヲ取用シ故片假字ト云也アイウエヲノ五十音ハ吉備
云傳ヘタリ是草書ヲ更ニ大ニ畧シタル者也平假名
ト俗ニ唱ルハ其運筆平易ナルガ故也時代ノ先後ハ
吉備公ハ先ニテ空海ハ後也片假字ハ先ニテいろは
ハ後也其證ハいろはノ中ニヘリツノ三字ハ片假ノ
ヘリツヲ取テ用ヒタリ然レハ片假字先ニテ平カナ
ハ後也ト知ルベシ

一 存字 俗語ニ思フ事ヲ存ズルト云知ル事ヲ存知
ト云存ノ字ノ訓ニ思フノ義ナリ又知ルノ義モナシ

勅り今を以てして移る可き事の上より死ぬべき
かたし如多君もつらんも亦業として勅め給ひ
と勅り人の宝と目あてあして好色大酒博奕して
一せと送てんとすらんものハ道法に偏し死すハ死
の前より死すらんべし

一崩薨 今ニ崩薨ノ差別ヲ挙ラシタル文見エズ唯
喪葬令ニ凡百官身亡者親王及三位以上ハ称薨五位
以上及皇親称卒六位以下達於庶人稱死ト見エタル
ノミニテ天子ニハ崩ト称シ皇后ニハ薨ト称スル事
ハ見エズ然レ共日本紀垂仁天皇三十二年皇后日葉
酢媛命薨トアリ又敏達天皇四年皇后廣姫薨トアリ

是皇后ノ位貴ト云へ共天子ト同シカレバカラズ
天子ヲ一人ト称シ至尊ト称シ奉ルハ外ニ相比ベキ
位ノ人ナキカ故也依テ之皇后ハ天子ト同ク崩ト称セ
ズシテ薨ト称ス是正礼也然レ共續日本紀廢帝天平
宝字四年六月皇后崩トアリ現桑畧記其外諸書ニ皇
后崩ト記シタルモアリ是正礼ヲ失へル称也若儲君
即位ノ後先皇ノ皇后薨シタテヒハ尊崇ニ別較ヲ
以テ崩ト称スル事ハ有ルベキ歟是ハ正礼ノ外ナル
ベシ或ヒハ時代ニヨリテ皇后ノ權威強ク平日其位
天子ト同等ニ事ヲ行ハル、世ニハ皇后ノ薨ニ至テ
モ天子ト差別ナク崩ト称スル事モアルベシ是亦正

因ヨリ始メテ文字渡リ夫ヨリ遙ノ後ニ文字ツカヒ成
就シタル此ニ至テ神代ノ語ヲ傳ヘテ書キ記シタレ
共其語傳ヘ同傳ヘ同シカラヌエハ書キ記スモ同シ
カラヌ也日本紀ニ一書ニ曰ト云テ諸書ノ不同ヲ其
終ニ挙ラレタリ何レヲ正説ト決定シガタキカ故也
千万年ノ昔ノ事ハケニモサコソ有ルベキ事ナレ然
ルニ後代巫学家ノ後神代ノ事ヲ説クニ昨日今日見
聞シタル事ヲ説ガ如ク詳ナルニ過タリカノ神ノ所
為アルベキ事トモ思ハレザル奇怪ノ事ヲハ陰陽五
行相生相剋ノ理ヲ以テシ或ハ仏説ノ三世因果方便
神通神変等ノ説ヲ以テ牽強附會ノ妄説ヲ作り或ハ

神ノ教ナリトケ儒家ノ仁義礼智孝悌忠信ノ道ヲ述
ヘテ文ヲ飾トシテ妄説ヲ巧ム皆後代ノ巫学者流ノ所
為也惡ムベキ事也神ノ事ハ元來神代ノ書ナク古人
ノ口々ニ語り傳ヘ同傳ヘノミナレバ年實年虚ナル
ベシ万古ノ事ナレバ詳ナラス明ナラス百年五十年
以前ノ事スラ虚実異同ノ説區々也猶近ク云ハバ今
日五六町許ノ隔リタル所ニテ往來ノ人々鬪諍シケ
ル事ヲ終ルニ諸説異同アリテ虚実決シ難シ是ヲ以
テ考ベシソモク諸國ノ神ノ本社ノ神灵ハ奇妙不可
測ノ靈驗著明^{イキニルキ}事アリ是神徳ノ侮^{アハト}ルベカラザル所也
畏レ崇ムベシ必深キ神理有テ然ルナルベシ狭ク小

サキ人ノ智ヲ以テハ其神理ヲ搜ル事叶ハカル事也
其神理ハ深シ人智ハ浅シ何ゾ及ブベケンヤカレバ
孔子ノ聖ナルスウ怪カ乱神ヲ語ラズト云ヘリ然ル
ニ今宋朝ノ性理ノ学ヲ好ム徒ハ理ヲ以テ神ヲ悔ル
者アリ愚ト云ツベシ理学ノ元祖朱喜ノ詞ハ人心ノ
靈莫不有知而天下之物莫不有理惟於理有未窮故其
知有不尽也ト云リ愚母ニ人心ハ灵妙ニシテ智アリ
トイハ共人ノ知ハ浅クシテ限りアリ天理ハ深クシ
テ限りナシ故ニ其理ヲ未窮アル也其知ヲハ尽ス氏
其理ヲ窮メ尽ス事ハ叶ハカル事也然ルヲ朱喜ノ意
ニハ益窮之以求至乎其極トス是叶ハカル事ヲ求ル

也益ノ事也大学ノ書ノ本文ニ致知格物ト云事ハ
アリ窮理ト云事ハ益シ朱喜格物ヲ以テ窮理ノ事ト
シタル也格物トハ人間之事蹟ヲ能クハ通達スル事
ヲ云フ也

一カハナクサ 古今集巻集十物名 かんからん

ふからふ うむ玉のゆめおほいおぐさんうりまなま
わくぬこちと 和名抄巻第十七水菜類水苔安色立
成云水苔一名河苔和名加波奈トアリ水菜類ニ水苔
紫苔并如此列タレバ水苔ハ食フベキ物也延喜式
祝詞ノ部鎮火祭ノ祝詞ニ吾名炊命能所知食上津國
心惡子并生置御來止宣返坐更生子水神飽川

菜塩山姫ナハシロヤマノメ四種ヨシキ并ナ生ウミ給メ此ココ心ココロ悪アク子コ心ココロ荒アラ水ミヅ神カミ飽ウレ
 塩山シロヤマ姫メ川カハ菜ナ并ナ持テ氏ウヂ鎮チン奉ホウ此ココ社シャ事ジ教キョウ惜シヨク給メ下シタアアリリ〇〇貞チカ丈チヤウ
 云海ウミノカイ生ウミルルヲヲ海ウミ苔カモシラトト云イハレ川カハ生ウミズズルルヲヲ水ミヅ苔カモシラトト云イハレフフ川カハ
 水ミヅハハ塩シホ気キナナリリ淡アワキキ故ユヅリ水ミヅ苔カモシラトト云イハレハハ即スガ川カハ苔カモシラトト云イハレ事コト也ナリ海ウミ
 川カハニニ生ウミススルル苔カモシラヲヲノノリリトト云イハレ也ナリ其ソノ苔カモシラ食クハベベキキ物モノナナレレババ野ノ
 菜ナニニ准スシシテテ川カハ菜ナトト云イハレ也ナリ〇〇カカハハナナリリササ〇〇ヲヲカカタタニニノノ
 キキ〇〇メメドドニニケケヅヅリリババ十ジウ此ココ三サンツツヲヲ古コ今イマ三サン木キノノ秘ヒ傳デントト
 テテ出デ所ショナナキキ事コトヲヲ造ツクリリ云イハレ事コトアリリ信シ用ヨウススルルニニ足タララズズ三サン
 木キ三サン鳥トウノノ傳デンノノ説セツ妄マダシ作サセナナリリ
 一イチヲヲガガタタニニノノ木キ 古今集卷第十物名 乙ニヨヨルルヲヲ
 みみりりののううめめ 海ウミ苔カモシラ生ウミズズルルヲヲ水ミヅ苔カモシラトト云イハレ事コト也ナリ

日向国高千穂嶽ハ神代ノ古迹也其山ニヲガタニノ
 木アリ日向人其枝ヲ折リテ江戸ノ人ニ贈リシヲ繪
 圖ニシタルヲ見シ事アリツバキノ葉ノ如クニテモ
 ナノ木ノ実ノ如ク赤キ実ヲ画キタリ其正物ヲモト
 メ見ベシ
 一メドニケヅリバ十 古今集卷第十物名 二条此石
 春宮のみやすん 下シヤヤクク時トキ々々めめふふけけづづりりををささせせりり
 花ハナののああままりりののううめめ 海ウミ苔カモシラ生ウミズズルルヲヲ水ミヅ苔カモシラトト云イハレ事コト也ナリ
 新續古今集俳諧歌 へへええののううめめををささせせけけづづりり花ハナ
 一イチツツヨヨルルヲヲ水ミヅ苔カモシラトト云イハレ事コト也ナリ

けつとくしあをいんれんをゆきくそを結ぶつげる
僧都觀教 州もふしんとけいりりりあんとそを

へしこしをさるりれん也 或説云めどハ妻戸也 貞丈
云今も松のあさうすく削りて花を修り

一三種神畧 賀茂貞淵が著セル延喜式祝詞考云神

代紀ノ一書ニ三種ノ宝ト云フヲ疑フ人アルハ貞丈

書ニ鏡劔ノ二種ノ事アリテ顯レタル事ニ依テ

モノヲ限ル也抑古事記ニ伊邪那伎命ノ天照大御神

ヲ生ニシテ其御頸珠之玉之諸母由良迹取由良迹志

而賜天照大御神而詔云汝命者所知高天原矣之ヲ神

代記一書ニ大汝貴命ノ天御孫命ニ此国ヲ讓奉テ退

給フ時モ即躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣トアリ之ヲ

天孫天降タマフ時天照大御神ノ詔ニサリ於是副賜

其遠岐斯ハ尺句璫鏡及草那藝劔云ト古事記ニシ

ルサレタリ是ヲ以テカノ一書ニ曲玉鏡劔ヲ三種ノ

神宝トハ有ナレバ何カイブカシトヤ且其句璫ハ天

シロシメス至ナルシルシノ神宝ソレニ准シテ国知

給フ大名持命モ是ヲ御頸ニカケタマヒワサテ天孫

天降タマフ時ニモ国ノ御主ナル御シルシニ天照大

御神是ヲ賜ハセシ事上ノイガナキノ命ノ天照大御

神ノ天知リマス御シルシニ賜ヘル倒也然レ此璫

ハ御身ニ著マス宝ニテ人ノ手觸ル物ナラズ故ニ古

へヨリ鏡劔ニツヲ以テ大倭ノ時ノ御シルシトハナ
シ来ルナリケリ又同首書云大谷持命ハ何レヨリ御
頭玉ヲ得タマフトモ見エ子ト須佐能男命ノ御讓ヲ
得玉フカラハ国王ニマシマセバ自^{オモカウ}八尺ノ曲玉ヲ御
頭ニカケ給ヒシナルベシ是ゾ御鏡御劔ニマサレル
大宝ナルヲ知ベシ又云イガナギノ命ノユヅリタマ
ヘル御ウナ玉ハ大御神ノ天知りタマフシルシナレ
ハ^其ソバ天孫ニモ賜ハズ天岩門ノ前ニテ招禱セシ
カノ天照大御神ノ御頭^{ウツタ}ニナゾラヘテ作りシヲ今
賜フ故ニ遠^ヲ岐^ス斯^云云トハ云也○貞丈日本紀古事紀
万葉集等ヲ按ズルニ神代ヨリ以來上古ニハ玉ヲ系

ニ貫キテ頭ノ^{モト}警^リニモ纏ヒ頭^{ツビ}ニモカケ手足ニモツケ
テ身ノ飾トセシ也是男女共ニ貴人ノ装^{ヨシキ}也ヤサカニ
ノマカ玉ト云名ハ神宝ノミニ限ラズ惣^{ソウ}テ良キ玉ヲ
ホノテ云名也此考別書ニ記ス今畧^ステ神宝ノヤサカ
ニノマカ玉ハ神祖ノ御物ナル故エレヲ貴ビ崇ルナ
リヤサカニノマカ玉ト云フ文字サマクニ書テア
リ皆漢字ノ音訓ヲ借りテアテ字ニ書タルナレバ其
文字ニ付テ義理ヲ説クハ誤也神代ニハ唯詞バカリ
有リテ文字ハナカリ也
一宣字訓 ノタマフト訓ム。ノタマフハ。ノリタマフ
也ノリハ。ノブル也ノルハ。ノブルノ中畧也。ノル。ナリ

音相通也。ミユトハリモ。ミユトハ御記也。ノリハ宣也。
祝詞ヲノツト、云ハノリト也。ノリハ宣也。トハタマ
フ也。ノリタマフト云事也。タマフヲ畧シテタベト云
タベヲ約ムレバ。テトナル。切音テ。テト。ト音相通エヘ
ノリテヲ轉ビテ。ノリト、云フ。ノリトヲ言便ニテ。ノ
ツト、云祝詞本語ハ。ノリトゴト也。宣給言ト云事也
フトノトゴトハ文字ニ写シテ太祝詞事又ハ大簿辞
共書ク太ハ敬ヒ崇ブ詞也。ノトゴトハ。ノリゴト也。上
ニ云コト同。文字ニカ、ハル事勿レ
一 九字 抱朴子曰。入山宜知六甲。秘祝祝曰。偪兵鬪者
皆陳列前行。凡常密祝之。無所不避。要道不煩。此之謂也。

ト見ヘタリ。抱朴子ハ道家ノ書也。道家ハ仙術ノ方ヲ
姓葛名洪。字稚川。漢朝人。師鄭玄。以九字ハ道家ノ万術
儒知名。後得神仙道術。著抱朴子。九字ハ道家ノ万術
也。然ルヲ仙家ニ盗ミ取テ前行ノ二字ヲ改メ在前ト
作シテ用之也。宋朝ノ施子美ガ軍林宝鑑第九軍務篇
ニ九字ヲ載テ大公望ガ周公旦ニ授ケニ秘方也ト云
其九字モ前行ノ二字ヲ在前ト作シタリ。大公望ノ時
仙法ハナシ。然ルニ仙家ニテ改メ九字ヲ以テ周公
旦ニ授ルト云ハ偽リナル事ヲ知ルベシ。用ル事勿レ
或人ノ云。真言宗ノ僧等ノ中ニ紙一枚ヲ納テ蓋シシ
テ置キ。其管ニ向テ九字ヲ行ヒサテ蓋ヲ開タレバ。カ
ノ紙四堅五横ニ切レ裂ケタルヲ見タリ。不思議奇妙

也ト云 貞丈云其紙ノ切レ裂ケタルハ九字ノ驗ニ
ハ非ズ彼僧ハ真言ノ法ニ幻術ヲ交ヘ合セテ行フ昔
也幻術ヲ以テ汝ガ眼ヲ眩惑セシメテ紙ノ切レ裂ケ
タルガ如ク見セシナルベシ古ヘ空海最勝等ガ奇妙
不思議ノ法驗ヲ云ヘル昔語りモ幻術ヲ交ヘ行テ仏
法ノ助トシタルモノ也幻術モ本天竺ヨリ出タル術
也釈迦モ密ニ幻術ヲ借リ用ラレシヲ仏ノ神道ト云
フナルヘシ奇妙不思議ニ非レバ愚俗ハ帰服セザル
ナリ其幻術ハ狐狸ノ類ヲ使フノ奇術也人ヲ魅スハ
狐狸ノ天性也他物ノ及サル所也

一 中臣祓詞 詞ト云ハズシテ中臣祓トバカリ云フ

ハ誤也祓ヲスル時中臣ノ職ノ人ノ唱フル詞ナル故
中臣ノ祓ノ詞ト云也本名ハ大祓ノ詞ト云物也古代
禁中ニテ六月ト十二月ノ晦日ニ大祓ヲ行ハル其時
ニ中臣ガ唱ル詞也此祓詞ノ作者モ時代モ詳ナラズ
一説ニ日神ヨリ天^イ兒屋余ヘ傳^シシク兒屋余ヨリ天
種子余ヘ受^テテ神代ノ文字ニテ書テ神武天皇即位ノ
時羨覽^ミシタマフ天神ノ壽詞ト云是也ト云ヘリ是根
ナシ事ノ妄説信ズルニ足ラズ 神代ニ文字無キ諸説
皆右ノ説ニ同シ信スベカラス賀茂真淵ハ此祓詞ハ
近江大津宮ノ末ヨリ清見原宮ノ比ノ間ニ書ワラン
ト云ヘリ是国史ニ六月十二月晦日ノ祓ノ見エシヨ

リ又詞ノ文ニヨリテノ考也桂秋斎ハ柳本人麻呂ノ
作也ト云然レ氏推量ニテ切ナル證ハナシ詳ナラズ
又此秘詞ヲ注解セル書夥シク有リ皆巫家ノ著述ニ
テ儒仏陰陽家ノ説ヲ交ヘ牽強附會シ中古以來ノ神
道ト云事ノ便リニナルベキヤウニ説ヲ造リタル者
ニテ取ルニ足ラズイヤケアル者也賀茂真淵ハ古学
ニテ後代ノ俗傳ヲ排斥シ延喜天曆以往ノ古実ヲ尋
ヌル学風ナル故延喜神祇式ノ祝詞ヲ悉ク注解セリ
其祝詞考ノ中ニ大祓ノ詞ノ注解モアリ俗傳ニ異ナ
ル奇説アリテ珍重スベキ事多シ然レ共餘リ考ヘ過
テ穿鑿ニ亘リテ誤レル事モアリ桂秋斎モ古学ト称

シ中臣祓氣吹抄ヲ著シ俗傳ヲ排斥セリ然レ氏秋斎
ハ偽ヲ好ム癖アリテ其著述ノ諸書妄説交レリ諸書
ヲ引テ證トスレ共其引書疑ハシキ者アリ彼ガ著述
ノ書ハオボツカナクテ信用シ難シ氣吹抄モ疑シク
テ真説取ガタシ何レノ注解モ知レガタキ事ニ至テ
ハ皆推量ノ説也書ヲ引ケドモ其推量ヲ實ニセンガ
為メニ舊事紀伊勢ノ五部書等ノ偽書巫学家ノ未書
等ヲ引キタル説ナドハ取ルニ足ラズ予中臣祓ノ詞
ノ注解ヲ述ント思ヒテ諸家ノ注解ヲ彼是窺ヒ見シ
ニ決シガタキ事アルニヨリテ著述ヲ思ヒ止リ又明
ナラズ詳ナラズ事ヲ云ハヌハ云フニマカレリ啓榮

ノ期ヲ俟ノミ

一 頼義家射術

清原武則ガ所望ニ依テ義家朝臣
堅甲三領ヲ重子テ樹枝ニカケテ射タニヒシニ三領
ヲ貫ケリト陸奥結記ニ見エタリ又同記ニ頼義ハ弱
弓ヲ好ミタニヒシガ祭ツ矢物ニ中レバ羽ブクヲヲ
飲ガル事ナカリシ由見エタリ射術ヲ知ラザル人ハ
此文ヲ讀テ文花ノ虚説トスベシ然ニハ非ズ弱弓ヲ
以テ矢勢ヲ強ク射ルハ惣身ノ力^{イカラ}ヲ矢ニ和合スル故
勢強キ也是射術ト云者也重子タル三領ノ鎧ヲ貫キ
タルモ同術ナルベシ力ニ勝タル強弓ヲ引ケバ弓ノ
コヨカニ我子カラヲ引奪ハレテ惣身ノ力^{イカラ}ヲ引矢

一 怒物食

ト和合セガル故却テ矢勢ハ弱キモノナリ強弓ヲ引
ケバ押手延ビズ其手ハ引ケズ両手フルヘ息ツマリ
胸へセキ上げ腹引ユモ上ツリニナリ腰モ足モ弱ク
ナル久シクタモツ事ナラズ我ハ祭^{イカ}タガルニ矢ノ方
ヨリハナレ行ク是惣身ノ力^{イカラ}ヲ引矢ト和合セガル
也如此ニテハ手前固マラス矢勢弱ク矢行キ狂ヒテ
中リモセス當世堂前通シ矢ヲ專トスル射家ハ弟子
ニ初メヨリ強弓ヲ引シメ段々ニ弓ノ合^アヲ上げテ射
サシム弓ノ力ニテ堂ヲ通サントスル也射本道ヲ
知ラザル也通矢ハ武用ニ立タズ
俗ニイカモノグヒトテ常人ノ食ガル物

ヲ食テ人ニ誇ル者アリ武勇ニモナラズ益益ノ戯レ
ナルノミナラズ終ニハ毒ニ中リテ生命ヲ失フ事ア
ルベシ昔仙臺ノ政宗猛將ナリシガ勇氣ノ餘リニヤ
イカ物食ヲセラレシニ何某トカヤモイカ物クヒニ
テ政宗ト挑ム人アリシガ一日政宗彼人ノ宅へ行レ
シニ鼠ノ赤子ヲ濃キ味噌汁ニテ煮テ進メタルヲ政
宗賞美シテ食ハレシガ帰宅シテ大食傷ニテ將ニ死
ニ至ラントセシヲ其家中ノ醫師高屋喜庵ト云モノ
豫毒圓ト云家方ノ毒消シテ進メ服セシメテ死ヲ救
ヒ命ヲ全セラレシ具賞ニ喜庵ニ禄千石ヲ賜ハリシ
其子孫今ニ仙臺ニ在リ禄モ減セズ昔ノ如シト彼國

人誇リキ匹夫トドハイカ物食モセヨカシ侍ノ主君
ニ仕ル者戰場ニテ主君ノ為ニ捨ベキ命ヲ益モナキ
イカ物クヒノ為ニ死スハ不忠ノ至也武士ハ戰
場ニテハ主君ノ為ニ命ヲ惜ムヘカラス常ニハ主君
ノ為メニ命ヲ惜ムベシ事ニ依テ常ニモ主君ノ為ニ
命ヲ捨ル事モアルベシ主君ノ為ナラヌ又私事ニ命ヲ
捨ルハ不忠ナリ古キ物語ノ書ニ大食ノ事トドハ見
エタレ共イカ物食ノ事ハナシ是モ近代ノ人ノ始メ
タル事ナルベシ

一桂秋斎 此秋斎初多田兵部名俊又近年国学方
高キ人也然レ共偽ヲ好ム癖アリ豪傑ナル者ナレ共

其偽大瑕也可惜哉彼カ著述書ノ引書疑ハシキモノ
多シ中臣祓氣吹砂ニ古物彙函ト云書ヲ引ケリ武門
故実百箇條ニハ古物彙典ト云書ヲ引ケリ其記ス所
古物ニ非ス妄作也已レガ著シテ已レガ引ケルナル
ベシ此外引ケル書ニ記ス所古実ニ非ス已ガ妄説ヲ
實ニセンガ為ニ品々ノ書ヲ作り置テ古実ト偽テ時
々取出シテ引用ヒタル者ト見ユ秋翁ガ書ハ疑ハシ
クテ取ガタシ毎書全篇偽ニモ有一ニケレ共偽交ル
故オホワカナクテ用ガタシ

一 偏見活見 書ヲ讀ミ文義ヲ解クニ只一方ニノミ
カメヨリテ外ニ通シ直ラヌハ偏見也此事ニハ當ル

共彼事ニハ當ラズ是偏見也又又ヲ解クニ轉用傍通
シテ此事ニモ當リ彼ノ事ニモ當リ滞リナキ是活見
也偏見ハ才智ノ拙ナキト淺學トニ在リ活見ハ才智
ノ巧ナルト博學トニ在リ又偏見ハ憤排スル事ナシ
活見ハ憤排ノ勢アリ

一 日下部 菅沼貞全問曰日下部氏ヲクサカベト訓
ズル義如何答曰クサカベハカサカベナルベシ日ノ
字カトヨム春日カスカニ日三日ヲフツカミカトヨ
ム是也サカハサガリノ略ナルベシカサガリ略シテ
カサカ也カハクト音相通ナレバカヲ轉シテカトナ
シテクサカベト云フナルベシ姓氏録ニ其所由詳ナ

ラス

一 靑丹

曹抄西三條装束抄等ニ靑丹濃靑ニ黄ヲサス表裏同
 トアリ同ノ字異本ニ白大塚嘉樹問曰靑丹ト云名目
 心得ス黄丹ハ黄ニ赤或ハ紅ヲ交タルニテ明也サレ
 バ靑丹モ靑ニ赤カ紅ヲ交ヘタラシハ難トシ濃キ靑
 ニ黄ヲサシタル者ヲ靑丹ト云事如何答曰古哥ニ奈
 良ト云枕詞ニ靑丹ヨシト云ヘリ古ヘ奈良ヨリ靑丹
 ヲ出シケルト也今モ奈良緑靑トテアリナ丹ト云
 ハ鉛ヲ焼テ製シタルヲ丹ト云フコレヲ和名ニハ。二
 ト云フ。ニトハスベテ赤キ物ヲ云代楯石ハ紫ナル石

ナリ是ニテ物ヲ染レバ赤クナルエヘ。二イシト云瓊
 ハ赤玉ナルエヘ瓊ノ字ヲニト訓セリ然ルニ靑キ土
 ヲ靑丹ト云ハ心得ラレヌヤウナレ共物ノ名ニモ言
 語ニモ轉用傍通アリタトヘバ藍ハ靑キ物ナルニ紅
 花ノ赤キヲクレナ井ト云ハツレナ井ヲ書ク文字ニアウセ
 藍ハ葉ヲ以テ染クサトシ紅花ハ花ヲ以テ染クサト
 ス葉ヲ用井花ヲ用井同類ノ事ナレバ藍ヲ轉用傍通
 シテ吳藍ト云也今世モ一類ノ物ノ内ニテカハクタ
朝鮮ノ物ニハテガレ共カハリタル所アルエハシ
朝イフ也クレナ井モ吳國ヨリ必出ル物ニアラハシ
藍ト色カハリヌルガレ共ノ藍ト云也胡麻胡桃ハ
モ胡國ノ物ニアラガレ共ノ麻子常ノ胡麻ハカハ
胡ト云ル故リ又墨ハ油煙ヲ子リカタメテ色ハク口キ

夕バハ昔ヨリ用ル文也 饒抄ニモ車ノ文ニモ面掛
馬ニモカタバミノ文付ル事見ヘタリ 又抄子ニ草
タハモアマノモニテモコ
トモノヨリオカシトアリ

一 壺装束

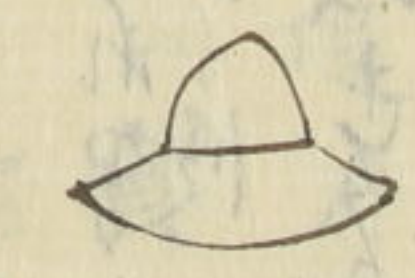
源氏物語抄子云 是はがさしと云

源氏河海抄ニ云 俊成郷のむすめの詠ニ云 市女イナメをみよすはぬ

きうふとつがさしと云 物子子エセモノノ新ウルオリ事
段ニアメフル日ノイナメ云云

同孟津抄ニ云 つがさしと云 といまぬとつがめらうらうら

○貞丈云 古画ニ女の歩行の形と



如此形の笠なり

中々うらうら

頭ハ入るるべし 市ノ物賣り又女イナメのうらうら

市女と云ふはうらうらと云ふは 練るごの茶衣也

それと云ふはうらうらと云ふは 今ハ市女と云ふは 同くそを云ふと云
らうらうらと云ふは 市ノ物賣り又女イナメのうらうら 同くそ
あふのうらうらと云ふは 市ノ物賣り又女イナメのうらうら 同くそ
つがめと云ふは 市ノ物賣り又女イナメのうらうら 同くそ
つがめてつがめと云ふは 市ノ物賣り又女イナメのうらうら 同くそ
下はぬの女のうらうらと云ふは 市ノ物賣り又女イナメのうらうら 同くそ
右の風俗なり

一 帷

かたはらト云ハ 單なるものといはるるなり
裏方片方を着ていしりかたはらト云ハ 麻乃
葉の葉に限りくくはらト云ハ 麻乃葉の葉に限りくくはら
かたはらト云ハ 麻乃葉の葉に限りくくはらト云ハ 麻乃葉の葉に限りくくはら

及く古の礼またくし物事子新泉寺一切経供養三皇
后定子行啓ノ事ヲ書タル段 忠寺云春曙抄 二行くら
いらくらりみとかうまぬの中としてくだまわさ
なりとんるまけ文としていかりまぬの中は髪と云こ
めたちやうとさふゆきと文と云くことと云んべん
是ハ身衣と裳との間ハ髪有りくまくだまうとかり
まぬの中としていかりまぬ

一袖几帳 袖几帳と云ハ几帳の内くまぬありまぬ
ありまぬと見ド我々もまぬと云くまぬと云く
かろぬ帳まぬと云くまぬと云くまぬと云く
物事子の 中將 斎信ハ何人か信が納言のまぬと云

しるまぬと云くまぬと云くまぬと云くまぬと云く
と云くまぬと云くまぬと云くまぬと云くまぬと云く
わくまぬと云くまぬと云くまぬと云くまぬと云く
かのまぬと云くまぬと云くまぬと云くまぬと云く
まぬと云くまぬと云くまぬと云くまぬと云く
三人の几帳と云くまぬと云くまぬと云く

一甘房小忌衣 物事子小官のせらむまぬと云く 中皇
ありまぬと云くまぬと云くまぬと云くまぬと云く
まぬと云くまぬと云くまぬと云くまぬと云く
のらくまぬと云くまぬと云くまぬと云くまぬと云く
男の小忌衣麻布に甘の几帳と云くまぬと云く

ズナシハ只助語也トモハ通音ニヨツテキ共オホケナ
シハ大也ハシクナシハ端也カタジケナシハ難氣也
サガナシハ惡也冥加ナシハ冥加也ナシト云フハナ
ルト云フニ同意也此等ノナシヲ毎トシテハ意大
ニ違フ也

一 イト、云又イナト云詞 二ツ共ニ最ノ字也モツ
トモト云事也イナナキイナノナ。最前最後也イトカ
シコシハ最恐也イトヨシハ最善也又イトバト云モ
最也イトイナ音相通也

一 ウタテト云詞 ウタテ共ウタ、共云轉ノ字也小
神韻會ニ轉ノ字ノ注ニ音衰切益窮也トアリ。キハ

リナキヲウタ、共云タトヘバ惡キ事ニウタテト云
ハキハナリナク惡キヲ云也 音衰ノ切ハ音ソナナリ
ニナリ第ニ依
テ音カハル也 古今集春歌 素性法師 ちかしくん
ありづまゆと梅の花うさそ白の袖とさうら
たり げらとてとらとついでも心いなり 又梅うさ
ととと轉音なり げらとついでも心いなり 又梅うさ
してまらびいぬらうり又云ウタテト云詞惡事ニ云ハ窮也
ナク惡キト云事ヲウタテト計リ云ハ非ナリウタテ
ワロキトイハサレバ多クガヘリサレ共惡キ事ヲウ
タテト云習ハセリ
一 カツト云詞 且ノ字ニ當ル且ハ字彙ニ菊且トア

献じて後ニ鳥目ヲハ運送ス数月ヲ歴テ京著スル也
 蜷川新右衛門尉親元日記ノ趣ニ如此ニ見エタリ
 一 小児ノタスキ 源氏物語卷中ノ巻小太郎いめきこ
 のたけさしめいねるしひつさどつうけきいひて見え
 のつら云々 柳家子ふらふら後めまよをぶらり思の同し整の
 おりいさるとさしハやうでうらさきそし物おとらるいさ
 つらさきさけふあいらこー腰のりこのきりうたり
 けりまらうらうらうらうら又回復いさうこえさ
 思の二のさうらうらうらうらうら二あいのうらうらど
 きぬあきてうらうらわがうらうらあかるといさうらうら
 按襪カキとちさきたさきと魚

一 姫一ウキキニ 下ノ姫松ノ糸 柳家子ふらふらのうらうらと
 三原ミハラの柳家のわりのひめまうらうらと云々 アツミツラ東登子のうら
 わりまうらハ公事根えよんこり又柳家子ふらふらのうらうら
 竹幸タケユキのうらとまうらつらいゆともうらうらつらいひめとらうらと
 云々ふらふらとらうらうらうらうら
 一 稻荷社 延喜式神名帳云稻荷神社三座下社大山
 祇中ツツミ社食稻魂上社土祖神ツツミ云皆神代ノ神也祇ニハ
 アラズ
 一 装束引ハコエト云詞 柳家子ふらふら正月ノライトク
 段ノころむいのさめ白さるとらうらとこえさかのうらうら
 く靴ツツミをばきて云 同家子身とかいじん人むらうらうら

わんとうめりとのまのさぬの色とさうりて
かゝのついのつゝさうりとのぬとさうりよひさ
えくも云又トウラ山トモノ、段ニ十のまりをりる女の匠が
さうりてくあど小いあつて門をこえりるが云川原を

一 糊封文

徳原子ナキ、コモト

遠きふり

さふ人の文を

かゝる封えん糊とさうりるが心りしや

一 大内裏事様

今式国史等ヲ考ルニ天下ノ政事年

中ノ公事ナド甚嚴重也徳原子榮花物語紫式部日記
代々ノ歌ノ初撰集ノ事書古物語ナドヲ見ルニ大内
裏ノ御垣ノ内宮中ノ風俗ナド常ニ何事モ大ヤリニ
徳ニノ大事ハ法式立テ猥リナラズ小事ニハ拘ラズ

世ハシク物智ノスルナク諸人ノ風情ノヒラカ
ニシテタノシゲ也御前ニモ男女交リ座シ君臣和悦
ノ躰也好色ナドモ固クハ禁セラレザリシニヤ公郷
殿上人ナド昼夜ニカキテ女房ノ局ニ出入レ雑終
ニ或ハ春花秋月ノ興ニ乗シテハ高声ニ詩歌ナドヲ
歌ヒ遊ビナトスル事アリ或ハ大路ヲ通り物乞フ尼
法師禁内へ入テ女房ノ局ノ前ナドニ立テ物乞フ事
ナドモアリシ何事モ狭ク小サカラス大ヤリニエル
ヤカナリシ様ニ見ヘタリ古歌ニモ、シキノ大宮人
ハ何トナレヤサクラカザシテケフモクヲレフト
ヲメル歌ナド其世ノアリサニ思ヒヤラレタリ天下

シ治ルニハ万事大ヤウニアルベキ也
一中臣被詞結語 大被ノ詞ノ結語ト常ノ被詞ノ結
語ト違タリ是ハナルベキ事也大被詞ヲハ常ニ用ラ
レサル故ナリ常ノ被ノ結語ニ拂申淨申事^初被所^初
ハ百万ノ神達仁^仁平^平久^久聞^聞食^食止^止啟^啟壽^壽ト唱ルハイカバ
也被所ノ神達ハ瀬織津姫速秋津姫伊吹戸速速佐須
良比^良呼^呼此四神ヨリ外ニハ被所ノ神ハ十キニ被所ノ
八百万ノ神達ト云ハ誤也上ノ文ニ右ノ四神被スル
事ヲ聞シメシテ贖物ヲ大海原ニ持出シ可^可可^可吞^吞三伊
吹放佐須良比失^失給^給ヒタリトアレバコ、ニ至テ被
戸ノ神ニ聞シ食セト申スハ前後相應セガレ詞ナリ

又上文ニ豊葦原ノ水穗^水國^國安國^安平^平知食^知止^止
事寄奉^事幾^幾トイヒシハ國ヲ安ク平カニ治メタニヘト
云事也然ルニ結語ニ拂ヒ申シ淨申事ヲ聞給ヘト云
ニ安ラゲノ平ラケリト云ハ毎用ノ詞也是大被ノ詞
ヲ直シテ常ノ被詞ニ用ヒントテ結語ヲ作り替ル時
ニ未^未練^練ノ人ノ作^作替^替タルベシ今是ヲ改ムベキナ
ラハ罪^罪止^止云^云罪^罪不^不有^有止^止被^被申^申淨^淨申^申ト云テ止ムベシ如
此罪ヲ被ヘバ穢レモ失セ去テ而後ニ八百万ノ神ヲ
拜スベシイニ父被詞モ終ラガレニ八百万ノ神々々
ヲ喚出スヘカラズ最初ニ八百万ノ神達^神字^字神集^神仁^仁集^集
賜^賜トアレトハ意味違メル事ナリ

一罪、字訓ノツミト云ハ、バタ膏ヲ摘ミ痛ムルヨリ起ル詞ナルヘシ人ヲツ罪ニスル事ヲツミナフト云フハ、ナフハ助語也。オコ行ナフ。トモ件ナフ。イザ誘ナフ。ナドノナフモ同

一鳥目通用金子通用人情 金子大判小判小粒ナドハ慶長ノ比始リシ物ニテ其昔ハ鳥目ノニ通用セシ凡物目ニ多キヲ見レバ心ニ多シト思ヒ心大キニナル目ニ少シト見レバ心ニ少シト思ヒ心小ナクナル今金子一両ヲ見バ少シト思フ昔シノ人ハ今ノ一兩ニ當ル程ノ錢ヲ見バ多シト思フ百兩千兩ニ至ルニテ同意也多シト思ヘバ各番ノ情ナシ少シト思ヘバ各番ノ情生ズ鳥目ノニ通用ノ時代ニハ人情大ナル

故敗用ノ巡行豊ニテ世間貪シカラズ金子通用ノ今ハ人情小キ故敗用ノ巡行豊ナラズ世間貪シ十兩ノ金子ハ袖ノ中ニ隠スベシ其十兩ニ當ル錢ハ座席ノ妨ニナル見ル所ノ多ク大ニ異也其見ル所ノ多クニ引レテ心ノ動靜大小異ナル事ナシト云ベカラス心大ナレバ人情敗ヲ敬ス心トラコルム心小ケレバ人情敗ヲ聚ル事ヲ好ム自然ノ勢也此事経済治術ニ関事也予此事ヲ説ドモ幽微ノ事ナレバ他此意ニ達ス

一うほの物洩 孫原忠寧云うほの物洩をばあはれ物洩
 経合の屋より川舟の俊景とりあすありくちま物洩
 ううとよゆ舞負大の詠子俊景の屋のまてきて卯の屋

四刻よりして漏刻と云く 守辰下と云漏刻と
ちり者をもしす竹く鐘鼓と云く 暮入る金の一
刻より右近衛取付する友人金の一刻の一時
と云く 丑の一刻より右近衛取付れ相壺の
をよ右近のつらさのよぬヤしの暮るこちりもらし
うりぬるまづとつらもそいぬるを代り住居の比を
是くまもいぬく時と暮るると漏刻と云く 銅壺より
入る兼と云くま兼より四十八刻とけけく 彼の壺の
ちりぬるく一つのさけことわくつらをも一刻に二つ
せも二刻にうくて四つあつをむ一時にちりぬる二つ
三つ四つと云く 漏刻の兼のさげもの敷成と云

刻よりぬるすあれと云く 子午の比は四十八刻と云く
何れも四つのさけ。くぬいさけと云く 伊勢物成より
て五三までと云く 是なり 伊勢物成 大和物成
此に又ぬ九つし八つ一の鼓の敷と云く 延喜式
の陰陽寮式云 諸時撃鼓 子午各九丑未八寅申七
酉戌六辰戌五己亥四云

一ムダ事 俗語ニ益益ノ事ニムダ事ト云フハ本ハ
ムナ事也ナト夕ト音相通シムナシゴトヲ略シテム
ナ事ト云ヒムナ事轉シテムダ事ト云也古キ詞ニ人
ノ兼テガルカ^空ラ車ヲムナ事ト云モムナシキ車ニ俗
語ニムダ事ニムダ事^{ムナシ}ノ字俗語ニテハムダ

トヨムベシ 俗語ノホラ知レバ古今
雅俗ニ通達スルナリ

一 和歌ウタフ 抑ふるまかりしと心いふるまで

心いふるまでとらふけとのうちうらひのこころ
心いけりよふてもういふ

一 事なりびと云詞 海人物他抑ふる子の歌よわ

海より何のさるけふとらふしるめくさふと今
系オナと云歌よふ人 抑ふる子のまじり
今さふことさるけふとらふ 抑ふる
しびいさるけふしるめくさふと今 抑ふる
まじいとなり 抑ふる 抑ふる 抑ふる
いとも。さるけふとらふしるめくさふと今 抑ふる

あつらひのさるけふとらふしるめくさふと今
抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も
抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も
抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も
抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も

一 古禁中不戒好色 抑ふるまかりしと心いふるまで

抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も
抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も
抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も
抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も
抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も抑ふるの字も

女のおよぶ前と切し域を極くその其より一より一を
時世も依く風俗異に古の好色ハ男女の情も昔の之後代の
好色ハそれより大なる禍と引か也

一 緇絶 諸装束其外古書ニ緇トアルハ今世ノ羽
二重ノ事也是ヲ平緇トモ云経緯ノ糸太細ナク地平
ナル緇也絶ハアレキヌノトテ悪シキ緇也今世メバ
緇トノモ云也経緯ノ糸太細交リ地平カナラザル也
是ニ對シテ平緇ノ名アリ

一 グルト云助語 又グリ共カキ共キル共
サグルモツグルノサグルノアサグルノカ
クルノソグルノトグルノヨグルノスグルノセグルノハグルノマグルノヌケル
サグルノモツグルノサグルノアサグルノカ
クルノソグルノトグルノヨグルノスグルノセグルノハグルノマグルノヌケル

○ワクル輪○ク潜ル彫○エ彫グル彫如此グルハ皆助語也

一 シムト云助語 此シムハ皆助語也
ウレシム悦○イツクシム愛○オツカシム懷○ホシム欲○オシム惜○タシム嗜○ナジム馴○

キ驕シム○セシム如此シムハ皆助語也
一 ムルト云助語 此シムハ皆助語也
○トムル止○カムル嚙○タムル濡○アワムル集○ウムル埋○コムル籠○サムル醒○シムルトム

○セム責ル如此ムルハ皆助語也
一 キルト云助語 此キルトハ皆助語也
ル給○ニキルト如此キルトハ皆助語也

一 ナフト云助語 此ナフトハ皆助語也
○ツ罰ニ罰ナフト罰○アカ贖ナフト贖○ニ贖ナフト贖○シ呪ナフト呪如此ナフトハ皆助語也

○オ行ナフト行○ト伴モナフト伴○イ誘ガナフト誘
○ツ罰ニ罰ナフト罰○アカ贖ナフト贖○シ呪ナフト呪如此ナフトハ皆助語也

一 鞆繪輪鋒磁字為神紋

上古射ル人左ノ腕ニ鞆ト

云物著ク革ヲ以テ作り其形圓ニシテ腕ニ當ル処ハ
平ニシテ腕ニ卷ク革アリテ縞ヲ付ク是弓弦ノ腕ヲ
彈クヲ防ク器也其中ハ空虚ナル故弦當レバ鳴ル者
アリ常ニ用ルハ熊ノ皮ニテ作りテ每文也伊勢ノ神
室ニ献ゼラル、鞆ハ麻ノ皮ニテ作りテ白キニ紋ヲ黒
ク画ク延喜式ノ兵庫寮式ニ見エタリ上古鞆張ト云
エ人有テ鞆ヲ作りシガ後代ハ其工人絶テナキニ依
テ神室ノ鞆ヲホニテ形ヲ作り黒ク塗テ銀泥ニテ紋
ヲ画ク今如此サテ其紋古今共ニ即今鞆ノ形ヲ三ツ
寄セテ圓ク画ク也鞆ノ形ハ左ノ圖ノ如シ



鞆ノ形如此也此形
ヲ似セテ如此シテ



是ヲ三ツヨセテ圓ク画
ケバ三ツトモヘノ紋トナシ

ナリ鞆ノ繪ナリトヘトモ工ト名付ル也右ニ云如ク
神室ノ鞆ニ此繪ヲ画ク故俗ニ鞆繪ヲ神ノ紋ト云習
ハセルナルベシ然レ共伊勢神宮ニ献ゼラル、神室
種々アレ共外ノ神室ニハ鞆繪ヲ画ク事ナレトハ
武家ノ家ノ紋ト稱スル如ク鞆繪ヲ神ノ紋ト云ハ俗
説也○輪鋒ヲモ俗ニ神ノ紋也ト云此文ヲ見タル射
ハ釘ヲ十六柄集メ柄ヲ内ニ向テ鋒キナリト外ニ向
ケ圖ク並ヘ輪ノ如ク置タル様ニ見ユル故ニ輪鋒ト
名付クレ共詳ニ見レバ釘ニハ非ス仙家ニ用ユル所

ノ獨銘ト云物ヲ八ツ打チカヘタル形也獨銘ノ頭画
カ干テハ三角ニテ釵ノ鋒ニ似タリ故ニ誤テ輪鋒ト
喚ズナリ出羽国羽黒山伏ノ不動袈裟ニ此紋ヲ金ニ
テ打テ付ル事モ獨銘ニテ作りタル紋トルベシ是ヲ
神ノ紋トスルハカノ神ト仏トシテヘニセニスル兩
部ノ神道ニテ用ル也○殊字ヲモ俗ニ神ノ紋也ト云
真俗仏事編ニ按華嚴十地品十地菩薩胸臆有卍字
又云如来ノ胸ニ大人相アリ其形殊字字如此シ吉
祥海雲ト名ヅクト云云翻譯名彙集云按卍字本非
字大周長壽二年主上皇太后權制此文著於天樞音之為
萬云是亦仏家ニ用ル字ナレバ神ノ紋ト云モ兩部

神道ノ俗説也神説ニヨリテ卍字ヲ作り服ノ飾神ヲ
モ人間ノ如クニ心得テ紋ヲ定ルコソ才カシケレ武
士ノ家ニ定紋替紋トテ故ニツモ三ツモ用ル事アル
故神ニモ勒繪輪鋒殊字ノ三ツヲ神ノ紋ト定メシナ
ルベシ神ノ紋ト云事令武国史其外正ニキ古書ニハ
曾テ見エズ唯後代ノ俗事也
一 卍字訓 俗ニ卍ノ字ヲトモ工ト訓ヲ付タリ其故
ヲ知りタル人ナシ玉篇卍字ノ注ニ布加切国名又巴
蛇吞象二年而後吐骨服之益心腹病トアリトモ工ト
訓ベキノ義ナレ諸ノ字書皆同ニ卍ハ大蛇ノ名也其
蛇ノ形ヲカタドリテ篆書ニ卍如此書クヲ楷書ニハ

巴如^{シク}此書クナリ写^{シク}国ニハ此巴蛇^{シク}アル故巴蜀ト号シ
テ巴ヲ国ノ名ニモ用ル也サレバ巴字ヲトモ工ト訓
ベキノ等ハ曾テナレ○貞丈按スル鞞^{トモエ}繪ノ形[◎]如此
巴字ノ形相似タルが故ニ其字形ニ批テトモ工ト訓
シ付タルナリ字ノ形ニ批テ訓ヲ付タルハ巴字ヨリ
外ニハナレ正訓ニハ非ズ俗訓也又水ノ[◎]如此廻
ル形ヲ巴^{シク}文ト云ハ鞞^{トモエ}繪ノ紋ニ似タルト云事ニハ非
ズ巴ノ字ノ筆勢ニ似タルヲ云也終レテ思ヒ誤ル事
ナカレ

一キボウシユ 橋ノ欄^{ラシ}杆ノ柱ノ頭ニ丸クシテ上ノ
尖^{トガ}リタル物ヲ作りテ置クヲギボウシユト云ギハ蔥^キ

也蔥ハ本名キトモ赤ヒトモシ共云草也俗ニ子ギト
云^{本名}ギ蔥ノ花ノ形丸クシテ上尖^{トガ}リタリ蔥ノ花ノ形
ナル珠^{シユ}ナルユハ蔥^キ宝珠ト云ナリ柱頭ノ飾ニ珠ヲ置
クニ其珠蔥花ノ形ニ似タル故ノ名也

一鳳輦^{フウケン}蔥花輦 天子常ニ乘御ノ輦ハ屋上ニ鳳ヲ作
テ置ク是ヲ鳳輦ト号ス神事ノ時乘御ノ輦ハ屋上ニ
蔥花ヲ作テ置ク是ヲ蔥^{ソラク}卷輦ト云蔥花ハヒトモシト
云草ノ花ノ形ニテ丸クシテ上尖^{トガ}リタルモノ也即橋
ノ欄^{ラシ}杆ノギボウシユノ形ニ同じ何故ニ蔥花ノ形ヲ
用ルソト深ク理ヲ尋ヌベカラズ只屋上ノ飾ニ珠ノ
形ヲ置タルが其珠ノ上尖^{トガ}リテ蔥花ニ似タル故蔥花

ト名付タル也或人ノ本州綱目ノ蔥ノ功能ヲ引テ是
故ニ蔥花ヲ鞞ノ屋上ニ置トイフ説ヲ作レリ穿タル
也也スベテ理説ハ此国ノ風ニアハズ理ヲ以テ云ハ
ハ蔥ハ甚惡臭キ草ニテ仙家ニテ禁ズル五葷ノ其一
ナレバ天^子乘御ノ鞞ニハ用フベカラサル理也如此ノ
理ニハ拘ハル事ナシ唯珠ノ形ノ蔥花ニ似タル故ニ
名付タルノ也。前記ノ参考スベシ
一キミノ称 文字ニテハ君ノ一字ナレ共吾国上古
ノ詞ニハ我カ仕ヘ奉ル主ノ御夫婦ノ事ヲ云也伊邪
那岐伊邪那美ノ岐ト美又神漏岐神漏美ノ岐ト美是
キミ也キハ男主也美ハ女主也カミロギ。カミロギ。一

神ノ名ニ非不惣称也

一 緋威鎧 紅威鎧 布引拙斎問曰賢説ニ緋威紅威一
也緋威ハ紅花ヲ以テ糸ヲ赤ク染ム紅威ハ茜ヲ以テ
染ム緋ニ比スレハ黒氣アリト云拙斎按スルニ然ラ
ザルカ緋威ハ茜染ニテ紅威ハ紅花染ナルベシ如何
答曰延喜式縫殿式緋ノ袍ノ染式ニ茜ヲ以テ染ム茜
ノ外ニ交ル染種ノ分量深緋浅緋ニ依テ違アリ然レ
且一徐院御代ノ比ヨリ延喜式ノ染式ハアレ共染匠
ノ拙カリシ歟又ハ俟約簡便ニ依リシ歟古式ヲ不用
シテ深紫深緋^{深紫ハ紫色深クテ黒クナル共ニ五倍}
深緋^{深紫ハ紫色深クテ黒クナル共ニ五倍}
子鉄備ニテ黒染ニシテ差別ナクナレリ浅緋乃緋也

深緋ニ對シテ是モ右ニ准ズレハ染式古ニ違ヘルナ
 浅ト云フナリ
 今ハ後代ニハ浅緋ノ袍ヲ藪芳ニテ染ル是古ノ染式
 ノ廢レ采レルト知ベシ又延喜式ノ染式ハ袍ノ料ノ
 綾一疋ヲ染ル分量也外ノ物ヲ染ル定ニ非ズ夫緋ト
 云ハ染色ノ名也藪モ红花モ染州ノ名也藪ニテモ紅
 花ニテモ藪芳ニテモ緋ノ色ニ夕ニナレバ緋ト云フ
 ベシ然レ共中古以來藪ニテ染レハ少シ黒ミテ緋ニ
 ナラズ红花染ハ緋ニナル工へ緋威紅威共ニ一物ニ
 テ赤威ハ藪染也ト云ハ此故也
 一常世国 トコヨノ国トヨム俗ニトキハノ国ト云
 四季ノワカナクナク常ニ同氣ノ国ト云云フ事也仙境

十ト云フガ如シ天竺国ハ大熱国ニテ常ニ夏ノ如シ
 四季ノカハリナクト云万国ノ中ニハ常ニ春ノ如
 ク秋ノ如ク常ニ冬ノ如クナル国モアルベシ古歌ニ
 モトジセヌトキハノ山ニスハ鹿ハオノレナキテヤ秋ヲ
 知ルテニ 朗詠集大 中臣能宣
 一訓読集 軍配ノ傳書也十七卷アリ此書ハ大江維
 時ヨリ小笠原家ニ傳來ト云毎卷ニ終リニ連名アリ
 其名ニ云清和天皇後胤自源氏家公當家代々相傳後
 三位源朝臣賴氏 省書ニ小笠原官内 大夫勅武勇入道 後三位源朝臣氏
 陰 省書ニ小笠原官内 大夫勅武勇入道 後四位下藤原信綱朝臣 省書ニ 上泉武
 守藏 上泉常陸介藤原秀胤岡本半助石上宣就傳來如此

アリ又同書中四十二箇條秘法ノ卷ニ因本半助ガ奥
書ニ此書慶長之頃於鞍馬毘沙門堂感得此本即鬼一
法眼相傳鞍馬寺僧祐頼の々相兼之本也予与相傳之
本合而見之咒之内梵漢之文字有些子相違想鞍馬所
出之本吉備大臣傳來其前後白河院ノ朝鬼一法眼自
多門天王夢中傳授之本也予所傳者大江維時傳來小
笠原家代々相傳之本也而祖之間年代莫大前後之條
少々相違有之者予雖然大方無異其畧岡本年助カ奥
書ニ寛永八年辛未九月日トアリ○貞丈按訓閱集第
六頭實檢ノ條ニ圖ト見エタリハ團ハウカヒ也同第
九ニ魔ノ作マウアリノ魔ハ武田信玄同卷ニ乳付旗ノ
比ヨリ用之

因下リ乳付旗ハ康二年又同卷天子ノ錦ノ御旗日
月ヲ付ル事アリ後醍醐天皇ヨリ始ル事同第十ノ上ニ
大追物ノ鞭ノ因アリ大追物ハ鎌倉ノ高忠開書ニ見
レリ騎射秘抄リエタ同第十ノ下ニ纒ノ掛マウヲ記タル所ニ天井ノ
緒中祿ノ緒等ノ右アリ代コレヲノ用方先セテ箆ヲホ
口ニテ包テサシテ天ノニスルコトヘハ多ク右ノ事
付テ其緒ニサシテ各ヲ付ケタルモノナリ共ハ皆後代始リタル事ニテ吉備大臣大江維時家
十ノ時代ニハ曾テ無之也然レニ此等ノ事ヲ載
タルヲ以テ訓閱集ハ奇詭偽作ノ俗書也ト知レベシ
信スル事勿レ又同書第十二四十二箇條下ニ傳系尸
其系因先子大公望黄石公張良吉備大臣鞍馬毘沙門

天王廿七。鬼一法眼。一奈次郎。源九郎。經。祐順。此四人
一列。二昆沙門。ヨリ傳ル。祐順。ヨリ清尊。以下鞍馬法師
十八人。僧名。今へ段々ニ傳へタル。赴キ也。次ニ弓矢上
畧。劔術。中畧。良馬。下畧。ト云事アリ。是ヲ三畧ノ秘傳ト
ト号ス。其秘傳ハ皆梵字符字。九字真言印相アリ。此外
訓閱集ノ全篇。梵字真言類ヲ用ル事甚多ク。專ニ佛法ヲ
用タリ。老子。太公望。黄石公。張良。ヨリ傳來ト云フ書ニ
仏法ヲ入タルハ。偽作ナル事明也。彼四人ノ時代ハ漢
土ニイテ。夕仏法渡リ來ラザリ也。然ルニ仏法ヲ入
タルハ。拙キ偽リ也。三畧ノ書ハ七書ノ中ニ在リ。訓閱
集ニ載タル如クナル。山伏ノスル業ノ類ニハアラズ

信スル事ナカレ

一 姫松 公事根源女叙位の篇より取りまらういと云い
内侍司の被官より物をも行幸の時姫松としてたう
しうらまゝなして供奉すりこれづ事い云い文とつら
くつれを姫松と云ふは右の如くはつゆのい姫松と云う
はる人なり 貞丈瑠わりのまらうのりといふは行幸の供奉
の時いふにまらうらまゝこと云い信お初と物ありと行幸の
るまらまらふ二所より先まららまらこといふまら文あり
取らゆえ今ふまらみ略えまららまらこと思ひてまら
らまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
松の字ハ訓と傳りてまらまらまら松樹と拘らるまらまら

又いめおと云馬のうぶりやうましりふあはるん

一職人歌合の繪九品 建保職人歌合〇二条良基公

職人歌合〇甘露寺親長郷職人歌合〇勸進聖職人歌

合〇菅家職人歌合〇一条禅洞職人歌合〇鳥丸光廣

郷職人歌合〇後水尾院職人歌合〇各名職人歌合

以上九品

一蛇若本鯉破前 菅沼貞主問曰明衡ガ新猿樂記曰

野干坂伊賀守之祭即蛇若本舞稻荷山阿小町之愛法

激鯉破前喜云云此蛇若本鯉破前ト云フハ何物ゾヤ

答曰和名抄ノ莖岳類ニ房内經云玉莖男陰ノ楊氏漢

語抄云原注云破前一云麻前良云貞丈按或ハ麻前

良ト然レバ破箭ハ男陰也鯉ハ鯉節也古ハ鯉トバカ

リ云カツホハカタウヲノ畧語也乾テ堅キ魚ト云事

也男陰起張シテ堅キヲ譬ヘテ鯉破前ト云下ノ句鯉

破前ニ對シテ蛇若本ト云タレバ蛇若本ハ女陰也女

陰ハ希シテ蛇ノ肉ノ如ク窪キ処アルユヘ蛇若本ト

云タル也是戲言也

一蟾蜍女尺 一条兼良公ノ尺素往来ニ蟾蜍女尺進

之候トアリ是ハ馬ヲ臯下シテカニキリノ如クヤセ

タル馬ト云フ事也此外ノ書ニモ瘦馬ノ事ヲ蟾蜍ト

書タルアリ俗ニ瘦タル人ヲ見テタウロギノ如クヤ

セタリト云ハ蟾蜍ノ云ヒ誤リ也カウロキト云虫モ

アルコハ紛レテ云誤レル也

ヤセ馬ヲ蠶娘ト云フ事
故事アルカ進テ尋ズレ

一青色

青ノ字アラシトヨシ藍洙ノ色也藍色ニ黄

色ノ交リタルヲ線ト云フ是ハ正青ニアラ不然レ共

草木ノ葉色ヲ青ト云フハ綠色ノ兼帯シタル黄色ニ

抱ラズシテ本色ニ依テ云也

一蒼色

蒼ノ字アリシトヨシ青ト同じ又白キニ少

シ黑色ノ交リヲ灰ノ色ナルヲ蒼ト云フ事アリ白キ

ニ少黑色ノ交リタル色ハ薄青ニ似テ紛ル、故蒼ト

モ云フナリ正蒼ニハアラズ本名ハ灰色也

一寺院号

寺院共ニ本ハ官舎官舎ハ俗ニ云
役屋敷ナリ之号也

異朝ニ鴻臚寺光祿寺大理寺等アリ皆官舎也昔朝ニ

八省院齋院等アリ皆官舎ナリ又淳和院辨学院等ア

リ学文所ノ名也異朝後漢明帝ノ時永平十年始メテ

佛像仙經ヲ白馬ニ負セテ渡来ル白馬寺ヲ建テ像經

并僧ヲ置ケリ是亦館舎ニ準ジテ寺ト号シタル也夫

ヨリ以後寺ト云ハ仏ヲ置キ僧ノ任処ノ名ト成レリ

其役所ヲ何某院ト号スル故是モ仏ニ付タル号ト成

レルナリ又仏寺ノ中僧ノ居所ヲ寮ト云是モ本ハ官

舎ノ名也昔朝ニ内藏寮大炊寮大藏寮兵庫寮其外多

シ皆官舎ノ名也仏寺ノ中ノ役所ヲ何寮ト云フヨリ

シテ是モ仏ニ付タル名ト成レリ又云死人ノ追号ヲ

何寺何院ト云フハ其人存生ノ時後世之為ニ仏寺仏

院ヲ建立シタル故其寺院ノ号ヲ称スル也是撰改國
白將軍家等高贵ノ人ハ寺院ヲ建立シ給フ故ニ此号
アリ存生ノ時寺院建立セラレズトモ死後ニ位牌ヲ
置處ヲ建立シテソレヲ何院ト号スルモアリ皆高貴
ノ人ノ上ヘノ事也凡下ノ人ノ院号ヲ称スル事ハ曾
テナキ事也今世ハ武家少祿ノ者モ皆院号ヲ称スルカ
タハライタキ事也ソレサヘアルニ金子ヲ出セバ高
人浪人ノ類ニテモ寺僧ガ院号ヲ賣リ物ニスル也又
云物ヲシラス儒者ハ將軍家ノ御追号ヲ文ニ書リ
ニ大猷院ヲ大猷君或ハ猷廟ト書キ常憲院ヲ
常憲君或ハ憲廟ト書ク類アリ御追号ハ

勅号ナリ

何ゾ私ニ院ノ字ヲ削リ云ルヤ上ヲバツジヨ藏如スルノ罪輕
カラズ其文異國ノ風ニ似テ直十カ如クナレ共此國
ノ禮ニ背ケリ禮ヲ知ラザルハ儒ノ道ニ非ス儒者ハ
唯文辭ヲ異國風ニ作ル事ノミヲ好テ此國ノ風ニ違
ヒ礼ニ背ク事ヲバ心ツカズ愚也ト謂ベシ吾國ヲ賤
メテ他國ヲ貴ビヨトハ何ノ聖人ノ云ヒシ教ナルヤ
近世ノ儒者ハ聖人之道ヲバ守ラズ唯文辭ヲ賣リ物
ニスル故道ニ背キタル徒多シ

一ウタツガハシキ云詞
ウタガハシキト云詞ニツノ
字ヲ添タルナリ異

一万葉集 榮花物語第一月ノ暮の巻ニ云昔高野

物もとも神やちん人のヤの字を法人是へ云はれ
べし上りのいいけの夢いそい神ぞちんといをてハ
志まりなり又神といてまゝ。古今 春日野よりつこ
ゆり代といまふい神ぞちん 右大臣 菅原 春山
この本れ方の力られはちちを神とちん 定家 神
やとていうことい決定せむ 神なれば上の句は城の
道よちちいなるといふも 神よちちを神とちんとい
れついで上の城の道よちちいなるといふも 神とちんとい
くあり 右の神ぞちん神とちん のちん 神の神
わいん 決定のまゝいそちちいなるいけは定しむつとてまゝ
よこ 神の道よちちいなるといふも 神とちんといふも

ち神の神つとていを 神味へちちぬ人のちちいなるいづ
かへし 右の城の道よちちいなるもの象と貞丈子

心ざん 神のたまたまいなるいづのれをともし神をさし

一 無量壽佛 阿彌陀ト云ハ 梵語ニテ 唐土ノ 語ニ 翻
譯スレバ 無量壽仏ト云トゾ 量リ 毎ク 壽命長ク イツ
ニデモ 死ガル 仏ト云フ 事也 極樂國ハ 別 世界也ト云
ヘトモ 是亦 天地ノ 間ニ アラガルニハ 有ニシ 天地ノ
間ニ 生活スル 物何ゾ 死ガル 物ノ アルベキヤ 阿彌陀
一人ヲ 無量壽ト云ヘバ 外 仏ハ 短命ニテ 死スル 仏モ
アリト 知ルベシ 仏ノ 死タルハ 何レノ 國ニ 生ルヤ
阿彌陀ノ 外ニ 二十五 菩薩モ 長生ナルカ。イツレモ 彌

陀ノ采迎ニハ供ヲセラル、由カラバ阿弥陀一人毎
量壽ニテハアルベカラズ外ノ仙共段々死タラハ極
樂園ニ仙ナリナルベシ毒モナケレバ子息モアルニ
ジハノ家斷絶スベシ熖魔王ノ代替リモアル歟是モ
死ナズ性ノ人歟内室モアル歟子息ハ何ト云ヤ是等
ノ事明僧ニ尋問テ知リタキモノナリ

一古律古令 日本紀天智天皇十年ノ紀春正月己亥
朔申辰東宮太皇第奉宣或本日大友施行冠位法度之
事大赦天下注曰濠度冠位之名具載於新律令云按
新律令トアルヲ是レハ此以前舊律令アリシヲ知ル
ベシ○同持統天皇紀四年記ニ依ル考仕令ト云文アリ

○同天武天皇十年紀二月庚子朔甲子天皇皇后共居
于大極殿以喚親王及諸臣詔曰朕今更欲定律令改中法
式故俱修是事然預就曼勢公卿有ハシ關分人應行○此後
文武天皇大室元年更ニ律令ヲ撰ハル其後又元明天
皇養老三年律令ヲ改撰セラル續日本紀ニ見ヘタリ

一巫字訓 カニナギトヨム事ハカミナギト云事也
カニハカミ也神ノ字也ニトム音相通コヘカミヲカ
ニ共云ナギハ子ギ也子ト音相通ユヘ子ギヲナギ
ト云子ギトハ子ガヒノ釣ツリ也ガヒノ切ギ也巫ハ神ニ子ガ
ヒイノリ申ス者ナルユヘ神ニ子グ子カフ事ナリ
ト云フ事ヲカミ子ギト云ヒ通音ニヨリテカニナギ

の撰り本朝書籍目録ニ世説中平自宇多天皇
至堀河院冲宇載君臣事及原為業撰とあり伊賀守為
業ハ土御門院冲宇の人後出家して法名寂念と号し
世説中平といハ業花物語の本名一ハ名業花物語と
いハ古き物語川口元常世説中平といあり中平の事
籍目録ハ世説中平とあり中平といハ後人の加筆也
在清が授
中平は赤深の作とあり後人の加筆也在清が授
本は業花物語といあり傳ふに中平といハ中平といハ
中平といハ中平といハ中平といハ中平といハ中平といハ
あり乃業撰なり 歟べし

一師字訓 日本紀應神天皇十五年紀曰所直岐亦能

讀經典ラ即太子菟道ウサミチ稚郎子ワカコ師焉シ云此師ノ字フミヨ
ミト又ミフミヨミト訓ヲ付タルハ當ラ又訓也フ
ミヨミトハ讀書人也是ニ師ノ字ヲ添テミフミヨ
ミト云是ニテハスベテ書ヨクヨム人也太子ニ讀書ヲ
教ヘ奉リタルバ師ノ字ヲシヘヒト、ヨムベシ
一春日祭太刀 春日祭ニ野太刀十振ハ柄ハ七ニ卷ツ
サモ大五尺トアリ長中太刀十振ハ同上長小太刀十振ハ常
是等皆持出ル唯祭道具アリ
一栄花物語 本名世説中平也本朝書籍目録ニ世説
四十卷及原為業撰とあり世説中平の事とあり
ぬ人多し一説ハ業花ハ赤深の作といハゆあり赤

まづそのよの人の中今のまゝぬくまゝぬえ
今のまゝぬくまゝぬ人の名のこと申す也人の名
とよしのまゝぬくまゝぬ人のこと申す也人の名
よの人のまゝぬくまゝぬ

一日本紀御讀不讀 叙日本紀初訓ノ篇ニ葬死。葬。諒。周。
山陵。殺。疾。疫。等ノ凶事又屎。尿。等ノ穢汚ノ事等ノ日本
紀ニ載タル文字ヲ主上ノ御前ニテハ讀ガルヲ故実
トス是ヲ御讀不讀之ト記シタリ是上ニ忌ミ嫌ヒ
給フニ依テ下ニモ是ヲ憚リテ讀ガルナルベシ然共
文字ヲ省キ去リ句ヲ脱落シテ讀タラハ文及ハ貫通
スニジヤ也然レバ日本紀ヲ日ニシテ聞シメスモ

無益ノ事也文及ハ貫通せず共日本紀ヨニセテ聞シ
メスト云名聞分ニ立テバ宜シキナルベシ末世ノ凡
ヤリ

一ト部氏 神代ニ太占ヲ司リシ家ナル故ト部ト云
ハウチヤハウチヤ也太占ハ鹿ノ肩骨ヲ扱テ櫻排ノ枝ヲ燒
テ占テ法アリ或人曰ト部ハ龜トトテ龜ヲ燒テ占
フ事ヲ司ルト部ノトノ字ハ龜トトノ字ナリト云
此説非也神代ニハ太占アリ龜トハ十ニ古事記日本
紀ニ太占アリ龜トハ欽明天皇ノ御時以來アリ日本
紀ヲ見テ知ルベシ後ニ太占ノ法絶シユヘ龜トヲト
部ニ司トラシム神代ニ文字ナシ唯詞ニテウラベト

云シノミナリ後ニ其詞ヲ文字ニ字ス時ニ占モウラ
トモウラナルエヘト部ト書キ也占部トモ書ベシ
ト部ノトノ字ニ付キ泥シテ神代ニ龜トヲ司ドリシ
ト云ハ誤也神代ヨリ應神天皇ノ十四五年ニテハ此
國ニ文字トシサレバ其間ノ事ハ後ニ文字ヲ付タレ
ナレバ字ノ音訓ヲ借リテ其詞ニアテ字ニ書タレ也
サレバ文字ノ義理ヲ以テ論ズル説ハ古義ニ叶ハガ
ルニ必シモ字義ニ拘リ泥リ事勿レ

一 懐風藻 一卷アリ此書ハ日本人ノ詩ヲ集メタリ
四十六代孝謙天皇ノ御宇天平勝宝三年ノ撰也撰者
ハ詳カラス此時代ハ唐朝ニ交リ使人往来アリ唐

ニ旅客シ彼ホニテ学文スル者モアリシ故詩モ唐風
也天平勝宝三年ハ唐朝ノ玄宗皇帝ノ代天宝十年ニ
當レリ楊貴妃盛ニ寵愛セラレシ比ナリ

一 たりきり 十月亥日香櫛の餅の事ニ碁石の如く
しう餅也京都將軍家時沖なりまると云鴨川就元
り記なり家記其外も時代の記あり餅の事ハ
碁石とぬつ如く指ニおしてさきて諸位より遠あま在て立
束せぬ人子も紙と包く紙ハ引合を全泥泥カク
菊志ぬぶつての葉をて画く切るもありそれ葉志の
ぶつての葉をてさきく餅六七つをかり入て包む包
こやかり餅の人の名と手竹と今も餅カみてい如く

とふぬ近世の事し是ハ老女おどりつゝふりし
るきやうき者たりし儀の産まれる人としこのま
しのまじし人とし名也としいふれく下をいひのこ
しが後よハ赤業のゆまうしくさうあげをといふ
かありくさくさくき婦の腹より胎を動也ハ新産に
るさしとくけりたのやめたるいふて身て胎を
さうあり心ハ新産なること知るなり胎をかくこと
いふらし産むるを産む時と云ふはあまをせしかりし
人と用ふれども赤産人ハと云ふても必新産婦
胎をさうふ赤産のなりし胎をさうふ人ハ胎を産
ぬわりの腹よりさう産むは産む人とし云ふこと

一 五のさうけられをたはふりてさうしと用ふべし
一 尾舎 續日本紀卷第九聖武皇帝神龜元年三月大改
官奏言上古淳朴冬穴夏巢後世聖人代以宮室亦有京
師帝王為居万国所朝非是壯麗何以表德其板屋草舍
中古遺制難宮易破空殫民財請仰有司令五位已上及
庶人堪堂者構立尾舎塗為赤白卷可也

一 田舞 同書卷第十四聖武皇帝天平十四年正月丁
未朔壬戌天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節田舞訖更
令少年童女踏歌又賜宴天下有位人並諸司史生於是
六位以下人等鼓琴歌曰新年始途何久志社供奉良采
萬代摩提丹寧訖賜祿有差○田舞ハ後代人田樂類歟

一起請 ヲコシ請フナリ 何ニテモ願テ起シ請フ事
ヲ云也 国史十ドニ起請ト云文アルハ是也 後代誓言
ニ今如此云フ詞ニ違ハシ 神仏ノ討ヲ蒙ルベシト云
文ヲ起請文ト云モ 討ヲ蒙ント云願テ起シテ討ヲ仏
神ニ請ヒ求ル意ニテ起請ト云也

一副字音 神祇官ノ大副少副又副將軍又副使十ド
ニハ音フトヨムベシ。フクトヨムベカラズ玉篇ニ芳
富切フ音也 字彙ニ敷救切フ音也 廣韻佐也ト是。フヒ
マスクルノ安ニハ音フ也 玉篇ニ並逼切フ音也 折也 破
也トアリ 音ト云キニハ音ニハ。サク。ワ
一保呂羽 風切羽 鳥ノ左右ノ兩翼ヲホ口羽ト云ホ

口羽ノ下ノ方ニ生タル長キ子羽ヲ風切羽ト云

一節下大臣 平家物語第十大掌舎の事十月三日の
日新帝の御世ハの御幸ありし内年と云極大寺
ふのつとめらるるかきしと云帝の御世ハの御幸ありし
家の内大臣はらや公つとめらるる節下の物なふつとま
へし龍のまをきておのいしりし 節下大臣の事
ニ云まらおあり

一不負胡籬則著淺沓 源平盛衰記卷二清水寺縁起
ノ余ニ清水寺燒失ノ後切堤川原ノ武士等陳頭ニ参
ス子細ヲ為被召問頼政ヲ陣ノ中ニメサレ頼政ハ白
キ見紋紗ノ水干小袴藍摺ノ帷袴テ立烏帽子ニ太刀
帶テ胡籬ヲ不負ハ淺沓ヲハケリ云云 此淺沓ノ事其

故不審可尋

一 猿樂 右同記第三澄憲新雨ノ条ニ猿樂ト申ハカ

シキ事ヲ云フバケテ人ヲ笑ハカシ侍ベルゾカシ云

重盛ノ語也○猿樂ノ本字ハ散樂也サレントシテ

一 へじグク へ字ク也右同記同条ニ小松内大臣其

時ハ新大納言ニテ當坐ニ候ハレケリ始メヨリ。へじ

ククシテエモ笑ハズ云へクグクハ物悦ビカラヌ

時顔ニカリテ唇ノ形へノ字ノ如クナルヲ。へ字グク

ト云也ヘノ字ニゴリハ非ナリ今江戸ノ詞ニベソヲ作

ルト云ニ同ジへソハへ字也トシ音相通也ヘノ字

バノ字ト云ヒ習ハシタリ

一 御薬ノ後取

榮花物語第十一つ布衣の巻ニ

しとくして長和三年ふらぬ四月十日よりを

てらしくめつしとくわくし海に中島志んを

ついでとらそくいれそくそくろくがし

みともり交るるそくそく後取ハ屠蘇白散ノ

ろしとけりしし江次第根源ニ見

一 女房衣重敷

同書 同条 室のゆきをりえら

ゆえけりしとくそくそく紅梅のゆきと

八重あしすそていくつともりそくそく

ふらゆのゆきとくそくそくそく

ゆきのゆきとくそくそくそく

一 戴餅イタビモチ

常夜御供才十一つありて夜の巻よりのく
こしせりやせぬあしてきふくさきもいりいふつてさ
はしとちかまふ所人こいえせんせんとのつううらめ
さくつえんやういふし心ちこそすれとそこのびやふ
つらふさふと信長和三年也去る中宗うこめいひめ
まらり

一 姫宮禊

同中宗十二玉の村岡の巻長和三年の
多むめあいの少年こよりをもつに
そのよりあつて今うつくとおよひささめ具とつたに
せさる

一 多んと云詞

何れと云ふ人多し又何しゆか

多んの歌いしに御供あつて何の意なるか
詞ニハ奈毛とあり多んと云ふ詞

一 上日ウツヒ

上日の二字ツカフル日トヨム仕ル日也今

武家ニ云當番日也平家物語ニ上日ノ者ヲ召仕フト
アルハ清盛大祿ヲ領シ家臣人数多キ故毎日當番非
番ヲワケテ當番ノ者ヲ召仕フト云事也又直日ト云
宿直ノ直也

一 上夜

上夜ハ今武家ニ云泊り番也夜ノ當番也又

宿夜ト云宿直ノ宿也

一 宿直

此二字トノ井トヨム殿居也當番ニテ御殿

ニ居ル也昼居ルヲ直ト云夜泊り番シテ居ルヲ宿ト云

一 繪カキ花付タル童 平家物語太平記等ニ見エタ
リ牛飼童コウシ小舎人コヤリ十ドノキル狩衣水子十ドニ繪ガキ
彩色シ又作り花ヲ綴付ル是ヲ付ケ物ト云也コレ一
日暗ノ風流ニスル事也四月賀茂ノ祭ノ日勅使ノ下
部檢非違使ノ故免コウジ十ド付ケ物ヲスル也作花ノミニ
限ラズ何ニテモ主人ノ好ミニカセテ作り物
ヲテ付ル也ツレククサニ故免ノワケ物トアルハ是也
故免ハ檢非違使
ノ廳ノ下部ナリ
一 大和国神代ノ皇都ニテ其国ニ高天タカ山タカ高天野タカアリ是
古ノ高天原也故ニ神代ニハ同国天香山ニ所生ノ物
ヲ取テ諸用ニ備ヘタリ天香山カカ天香山カカ掩木天香山

ノ銅天香山ノ賢木天香山ノ真男鹿天香山ノ波々迦
等是也日本紀古事記古語拾遺等ヲ見テ考ベシ本ハ
天ノ高ク廣キヲ高天ノ原ト云フニ依テ皇都ヲ貴テ
ト云フニ同ジヤト云ハ大和国ハ大山アル國也
其山ノアル処ニ皇都アリ故ニヤト云ト云ハ止
ル也君臣其山ニ宮室ヲ建テ止リ住ム故ニト云ト
ハ其都ヲ云也即山都也神代ニハ文字ナシ唯ク千
ニテヤトト云フ名ノミニテ和傳日本山跡等ノ文
字ハ後ニ付タル也後ニ文字ヲ付ルニ和ノ字ヲ用ヒ
タルハ皇都ヲ貴テ廣大ニスルノ稱也西土ニテ大唐

やうくハモヤウと云々云々ツッガ山と云々云々と云々考れ
を以て海江比叡山の傳の傳と云々云々又才七
母の節事ゆりされし事ハ古き秘と云々云々
ておろぐくハ云々云々の事ハ云々云々の事ハ云々
バクと云々云々 これハたれハ云々云々の事ハ云々
を以て云々云々云々ハ元久文十一月廿日薨朝時代
ノ人也其子定家郷仁治二年八月廿日薨仁治八四年
院年号實朝頼家時代ノ人也其子為定郷建治元年五
月一日薨建治ハ後宇多院年号類嗣惟康時代ノ人也
其子為氏郷弘安八年八月出家弘安後宇多院年号惟
康時代ノ人也其子為世郷ハ文保三年續千載集奏覽

文保二年追花園院三年後醍醐院御代也為世郷ハ曾
我兄弟ヨリモ遙ニ後ノ時代ノ人也為世々ノ歌ヲ古
歌ト記シタルヲ以テ考ルニ曾我物語ハ室町殿ノ代
ニ作リシナリ
一ノケンラウ 曾我物語才七母の勳業ゆりされし事ハ
云々云々の事ハ云々云々又後集の謡ハ能く後ノ
才のヤンラウカハこの一つハ云々云々ハ面道ナリ
約ヤウメタウと云々云々と申面も才の事ハ云々云々
才の面の事ハ云々云々の事ハ云々云々ハ廊下の如く云々
づくゆえヤンラウと云々云々但ヤンラウハ云々云々の事
語したラ横の相通の音也

一 ありのふたとれぬ ヤ 牛飼あり中あつらん
とやそのらんそれらてうとアムのみふ取つるを
といふれも本ありてうよしととばうつそりる
まさくや牛こでうらんといふのうらうらとといふ
分る 三 源平盛衰記第三十三 光隆 牛飼車と
門外に遣り出テ後 ヲ 一 大 櫓 エ 下テヌレバ飼立タル強
牛逸物也何ノ滞カアルベキナレバ如飛 ツ 走る木曾車
ノ内ニサカ様ニマロブ 中 畧 牛飼ハ今ハ中直りセ
ト思フテソレニ候フ御手形ニ取ツカセ給ヘト教テ
レバイツクテ手形トモ知ラスゲニ見エケル時ニ其
レニ候 ラ 方立 ラ ノ穴ニ取付セ給ヘト云時初テ取付テア

ハレ支度マ是ハ牛コテイガ支度力又主ノ殿ノ構カ
トゾ同タリケル云云兼久記ニ実朝公建保七年正月
廿七日右大臣并賀ノタノニ鶴岡八幡宮へ参詣ノ事
ヲ記シタル条ニ若宮ハ参リツカセ給ヒテ車ヨリオ
リサセ給ヒケルガ細太刀ノ柄ノ車ノ手形ニ入タリ
ケルヲ知ラセ給ハテ折ラセ給ヒヌ云云
一 牛ニテイ 右ニ見タリ木曾義仲ガ牛飼ト云事ヲ
知ラスシテ牛コテイ云タル也牛コテイハ牛健兒也
健兒 コ ム デ イ トハ 中 間 ヲ 云也健兒所ハ 中 間 ノ 居處
也ト下学抄ニ見エタリ牛コテイヲ俗本ニコノ字ニ
濁ラサシタルハ非也テノ字ヲ濁ルベシ

ヲ用也此二字ハ易经ノ積善餘慶トアルヨリ出タリ
然レ共教ノ事ニハ叶ハズ餘計ト書ベシカゾヘ餘リ
ト云事也

一 軍法兵法 軍法ト云フハ兵士ノ組合セヤウ鳴リ
物ノ相圖ノ定。坐作進退ノ法式也後代甲列流謙信流
ナド、云フ軍法ト云フハ誤也軍術共兵術トモ云ベ
シ又劔術ノ事ヲ兵法ト云フモ誤也劔術トモ刀術ト
モ云ベシ兵法ト云ベカラズ

一 排斥宋儒 山鹿甚五左衛門茂矩甲列流ノ軍術者
也聖教要録ヲ著シテ宋儒ヲ排斥セリ其後荻生惣右
衛門茂卿モ宋儒ヲ排斥セリ山鹿ハ先ニテ荻生ハ後

十リ 荻生茂卿伊藤仁齋兩家共ニ古學ト号ス宋儒ノ
説ヲ用ヒズ荻生ハ孟子ヲ用ヒズ伊藤ハ孟子ノ
用ユ



漢也此二字ハ新經ハ新善餘慶ハ下ハマ出久リ
然ハ共教ノ事ハハ叶ハハ餘計ト書ハレカクハ餘リ
ト事也

一軍法兵法一軍法ハ兵士ノ組合セテウ鳴ル
如ク相圖ハ定メテ作進退ハ注式也後代用列流陣法流

十ノ一云々軍法ト云フハ根也軍術ハ兵術トモ云ハ
心也軍術ノ事ヲ兵法ト云フモ誤也軍術トモウ術ト

一軍法兵法一軍法ハ兵士ノ組合セテウ鳴ル
如ク相圖ハ定メテ作進退ハ注式也後代用列流陣法流

一軍法兵法一軍法ハ兵士ノ組合セテウ鳴ル
如ク相圖ハ定メテ作進退ハ注式也後代用列流陣法流



